

豊 後 府 内 11

中世大友府内町跡第61次調査区

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(8)

2008

大分県教育庁埋蔵文化財センター

豊 後 府 内 11

中世大友府内町跡第61次調査区

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(8)



大友61次Ⅰ区 調査区から北西を望む



大友61次Ⅱ区 調査区を東から望む

序 文

本書は、大分県教育委員会が大分県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所の依頼を受け、実施したJR久大本線高架化事業に伴う、中世大友城下町跡の第61次発掘調査の報告書です。

この遺跡のある大分市では、古代に国府が置かれて以来、豊後国の政治経済の中心地として役割を果たしてきました。戦国時代には豊後国の守護であった大友氏の本拠地として栄える一方、南蛮貿易やキリスト教の日本布教の拠点となり、日本の中世都市の中で、特別な存在でありました。

今回報告の大友府内町跡第61次調査の位置は、戦国時代に「府内」と呼ばれた頃の様子を描いた「府内古図」では、町の南寄りにある「瑞光寺」付近と想定されます。この寺院は、鎌倉時代に一遍上人が訪れたとの記録が残されています。

発掘調査において、戦国時代の柱穴や建物施設を区画する溝等の遺構が検出され、周辺からは寺院の屋根を葺いた瓦や生活に使用した陶磁器が出土し、当時の社会を知る貴重な歴史資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財の保護ならびに地域の歴史や先人の暮らしを理解する資料として、また学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、発掘調査に御支援・御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成20年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター所長

福 田 快 次

例 言

1. 本書は、大分市元町に所在する中世大友府内町跡第61次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大分駅付近連続立体交差事業に伴い、大分県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所から委託を受けて、大分県教育委員会が実施した。
3. 中世大友府内町跡第61次調査の現場作業は平成17年8月19日から平成17年11月18日にかけて実施した。
4. 現地での写真撮影・遺構の実測は調査担当者が行った。
5. 遺物実測・トレースなど報告書作成に伴う諸作業については調査員のほか、大分県教育庁埋蔵文化財センターの整理補佐員の多大な協力を得た。
6. 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市大字中判田ビワノ門1977）において保管している。
7. 本書で使用する方位はいずれも座標北である。座標値については、旧日本測地系と（ ）内の世界測地系の数値を併記している。
8. 本書で使用する遺構略号は、以下の通りとする。
SD：溝、SK：土坑、SX：その他の遺構（不明遺構・集石遺構・整地層など）
9. 本書で使用した出土遺物の分類については、以下の文献による。
青花 小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）
青磁 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）
白磁 森田 勉「14～16世紀の白磁の分類について」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）
備前系陶器
乗岡 実「中世備前焼甕（壺）の編年案」・「備前焼播鉢の編年案」（『第3回中近世備前焼研究会資料付第1回・第2回研究資料』所収 2000年）
乗岡 実「近世備前焼播鉢の編年案」（『岡山城三之曲輪跡一表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査一』岡山市教育委員会 2002年）
中国南部産焼締陶器鉢
吉田 寛「中世大友府内町跡出土の産地不明焼締陶器について」（『貿易陶磁研究』No.28 2003年）
京都系土師器および土師質土器
塩地潤一「大友領国内における京都系土師器の分布とその背景」（『博多研究会誌』第6号 1998年）
塩地潤一「九州出土の京都系土師器皿」（『中近世土器の基礎研究』XIV 1999年）
坂本嘉弘「中世大友府内町跡出土の土師質土器編年」（『豊後府内2』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第2集 2005年）
吉備系土師器碗
山本悦代「吉備系土師器碗の成立と展開」（『鹿田遺跡一第5次調査一（医学部および同付属病院管理棟新設予定地）』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター1993年）
瓦
森田 克「屋瓦」（『摂津高槻城』高槻市文化財調査報告書第14冊 高槻市教育委員会）
10. 本書の執筆と編集は坂本嘉弘が行った。

目 次

第1章 はじめに	
第1節 調査の経緯	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の経過	1
3. 調査の体制	3
第2節 遺跡の立地と環境	4
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	5
第2章 調査の成果	7
第1節 調査の経緯と概要	7
1. 調査に至る経緯	7
2. 調査の経過と概要	7
第2節 I区の遺構と遺物	9
1. 溝	9
2. 土坑	13
3. 包含層・表土出土遺物	17
第3節 II区の遺構と遺物	20
1. 土坑	20
2. 包含層・表土出土遺物	26
第3章 まとめ	30

挿 図 目 次

第1図	中世大友城下町跡発掘調査状況	2	第22図	府内町跡61次調査Ⅱ区SK210出土遺物実測図	22
第2図	中世大友城下町跡の周辺の地形と遺跡	3	第23図	府内町跡61次調査Ⅱ区SK211・SK212実測図	23
第3図	中世大友城下町跡の周辺の主要中世遺跡	4	第24図	府内町跡61次調査Ⅱ区SK211・SK212出土遺物実測図	23
第4図	府内古図と街路名称の設定	5	第25図	府内町跡61次調査Ⅱ区SK215実測図	24
第5図	府内町跡61次調査の位置と周辺の調査状況	8	第26図	府内町跡61次調査Ⅱ区SK215出土遺物実測図	24
第6図	府内町跡61次調査Ⅰ区SD101～106遺構実測図	9	第27図	府内町跡61次調査Ⅱ区SK215出土丸瓦実測図	25
第7図	府内町跡61次調査Ⅰ区SD109・SD112・SD113実測図	10	第28図	府内町跡61次調査Ⅱ区SK217出土遺物実測図	25
第8図	府内町跡61次調査Ⅰ区SD114実測図	11	第29図	府内町跡61次調査Ⅱ区SK217実測図	25
第9図	府内町跡61次調査Ⅰ区SD115実測図	11	第30図	府内町跡61次調査Ⅱ区銅銭実測図	26
第10図	府内町跡61次調査Ⅰ区各遺構出土遺物実測図	12	第31図	府内町跡61次調査Ⅱ区包含層出土遺物実測図	27
第11図	府内町跡61次調査Ⅰ区SK108実測	13	第32図	府内町跡61次調査Ⅱ区表土・表採遺物実測図(1)	28
第12図	府内町跡61次調査Ⅰ区SK111出土遺物実測図	14	第33図	府内町跡61次調査Ⅱ区表土・表採遺物実測図(2)	29
第13図	府内町跡61次調査Ⅰ区SK111出土丸瓦実測図	15	第34図	久大線高架化事業に伴う発掘調査で検出された遺構 と周辺の地形	31
第14図	府内町跡61次調査Ⅰ区SK111出土平瓦実測図	16			
第15図	府内町跡61次調査Ⅰ区出土遺物実測図	17	付 図		
第16図	府内町跡61次調査Ⅰ区出土瓦実測図(1)	18	付図1	府内町跡61次調査Ⅰ区遺構分布図及び土層図	
第17図	府内町跡61次調査Ⅰ区出土瓦実測図(2)	19	付図2	府内町跡61次調査Ⅱ区遺構分布図及び変遷図	
第18図	府内町跡61次調査Ⅰ区出土土管実測図	19	付図3	久大線高架化事業に伴う発掘調査区 (府内町跡31次・61次・71次)位置図	
第19図	府内町跡61次調査Ⅱ区遺構出土遺物実測図	20			
第20図	府内町跡61次調査Ⅱ区SK210 実測図	21			
第21図	府内町跡61次調査Ⅱ区SK210出土銅銭実測図	22			

表 目 次

第1表	遺構一覧表	32	第5表	遺物観察表(土製品)	35
第2表	遺物観察表(陶磁器・土器)①	32	第6表	遺物観察表(金属製品)	35
第3表	遺物観察表(陶磁器・土器)②	33	第7表	遺物観察表(瓦)	35
第4表	遺物観察表(陶磁器・土器)③	34			

写 真 図 版 目 次

巻頭図版	大友61次Ⅰ区調査区から北西を望む 大友61次Ⅱ区調査区を東から望む		写真図版3	Ⅰ区SD115完掘状況	38
写真図版1	Ⅰ区作業風景	36		Ⅰ区SK111調査状況	
	Ⅰ区SD109・102・103			Ⅰ区SK111出土漆器	
	Ⅰ区SD114完掘状況		写真図版4	Ⅰ区SK111京都系土師器出土状況	39
写真図版2	Ⅰ区SK108南壁	37		Ⅰ区SK111軒丸瓦出土状況	
	Ⅰ区SK108・SD104			Ⅱ区SK215上面の石組	
	Ⅰ区SD115土層断面		写真図版5	Ⅱ区SK211・212	40
				Ⅱ区SK217	
				Ⅱ区地山検出状況	

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

1 調査に至る経過

別府湾沿岸は、瀬戸内海を通じて古代から、九州の玄関口としての役割を果たしてきた。中でも大分川左岸地域は、中世・近世・近代を通じ、豊後国・大分県の行政・経済の中心地として発展してきた。特に明治以降、瀬戸内海路に加え、鉄道の敷設や道路網の整備など、陸上交通の発達が顕著になると、県庁所在地である大分市は、東九州の交通の要衝となった。そうした中、明治44年に大分駅が近世城下町の外堀の南に建設されると、周辺は大分県の物流の中心地となり、以後太平洋戦争による空襲の打撃を受けながらも、今日まで発展を遂げた。

しかし、昭和40年代以降の自動車交通量の増加に伴い、大分駅周辺の交通状況も変化を起し、周辺の鉄道と道路の平面交差部分では交通障害を引き起こす結果となった。また、拡大する大分市中心街にとって、鉄道部分は市内を分断する要因ともなった。そこで、これらを解消するため昭和45年、「大分市国鉄路線高架化促進期成同盟会」が設立された。この動きは、25年後の平成7年に「大分駅付近連続立体交差事業」として採択され、具体化することになった。

一方、大分川左岸沿いには、自らキリシタンとなり、南蛮貿易を行った戦国大名である大友宗麟の城下町「府内」があることが、古絵図から知られていた。この古絵図には、大友館・万寿寺など当時の主要な建物の位置や、道路・町屋の配置などが明瞭に描かれ、都市の構造を伝えるものであった。その位置は昭和31年に刊行された大分市史の段階で、大友館や万寿寺をほぼ特定できたが、使用できる地形図の問題もあり、精度に欠けた。その後、昭和63年に刊行された大分市史・中巻では新たに府内古図が確認されたこともあり、明治時代の地籍図と照合し、さらに現在の地図に置き換えた。その結果、現在の地図上に高い精度で、大分川に沿った東西約0.7km、南北2.2kmの規模の戦国時代の「府内」を再現することができ、「中世大友城下町跡」として周知遺跡となった。

中世大友城下町跡

大分駅高架化事業である「大分駅付近連続立体交差事業」の日豊・豊肥線は、この戦国時代の「府内」を東西に貫く土木工事となり、しかもこの町の中核部である大友館の南側を通過するものであった。また、久大線は町の南側沿いを調査することとなった。そこで、大分県教育委員会では、事業主体者である大分県土木建築部と協議を行い、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。

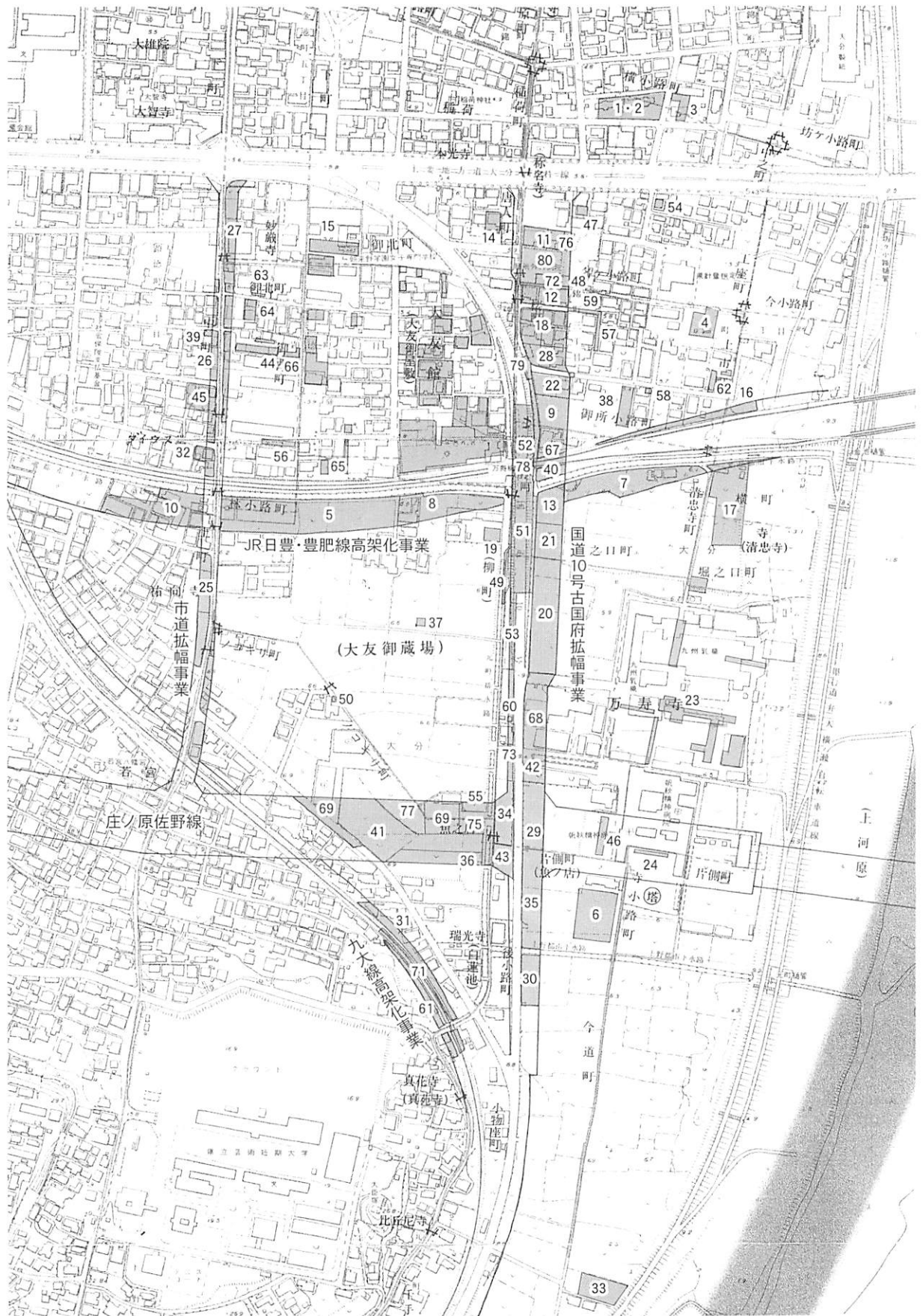
2 調査の経過

大分駅付近連続立体交差事業に伴う、大分県教育委員会による中世大友城下町跡の発掘調査は、平成11年8月から始まる。しかし、この遺跡に対する発掘調査は、平成8年から大分市教育委員会が大分駅南地区の区画整理事業に伴う、移転先の宅地造成地や民間開発などに対応し実施していた。すなわち、同じ遺跡を2つの組織が発掘調査することとなった。そこで、大分市教育委員会と協議を行い、遺跡全体を「中世大友城下町跡」とするが、大友館部分は「大友館跡」、町屋跡部分は「府内町跡」として県教育委員会と市教育委員会が重複することなく発掘調査着手順に調査次数を重ねることとした。また、遺構実測をする際には、国土座標を必ず使用することにした。

こうして、平成11年8月、大分駅付近連続立体交差事業に伴う発掘調査として、「府内町跡5次調査」が、開始された。そして、平成12年には「府内町跡7次調査」と「府内町跡8次調査」、平成13年には「府内町跡10次調査」と「府内町跡16次調査」し、平成14年8月に「府内町跡10次調査」が完了し、日豊・豊肥線の高架事業に伴う主要部分の発掘調査はほぼ終了した。

府内町跡61次調査

一方、久大線高架事業に伴う発掘調査は、平成12年に日豊・豊肥線の分岐点付近を調査することに始まり、平成15年からは「府内古図」に描かれる「瑞光寺」と想定される場所を、軌道敷の北側を「府内町跡31次調査」、平成17年に南側を「府内町跡61次調査」、平成18年に移設した軌道敷部を「府内町跡71次調査」として実施し、終了した。



第1図 中世大友城下町跡発掘調査状況 (番号は調査次数で70・74・81は地図の範囲外)

2007年12月末現在

3 調査の体制

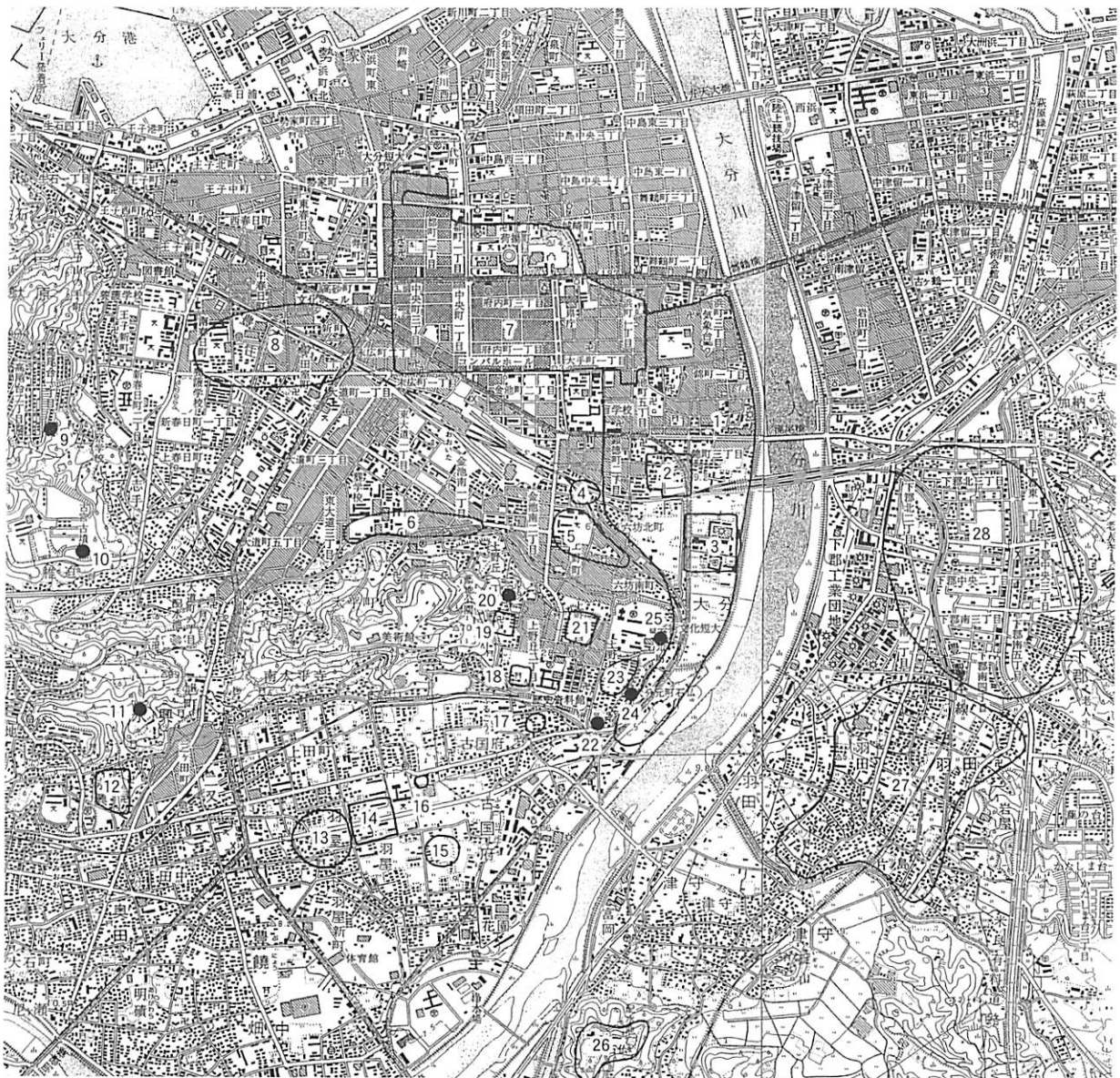
本書に報告する平成17年に発掘調査した府内町跡61次調査は以下の調査体制で実施した。役職名は調査当時のものである。調査指導者からは、平成17年度に実施した県・市教育委員会が実施した中世大友城下町跡の全ての発掘調査に対して意見・教示等の指導を受けたものである。

平成17年度

調査指導者 河原純之（川村学園女子大学教授）
 後藤宗俊（別府大学文学部教授・大分県文化財保護審議会委員）
 小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授）
 坂井秀弥（文化庁記念物課埋蔵文化財担当主任調査官）

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長	渋谷忠章
調査第一課長	栗田勝弘
主 査	矢部勝徳（発掘調査担当者）
嘱 託	権藤聡子（発掘調査担当者）



第2図 中世大友城下町跡の周辺の地形と遺跡

1.中世大友城下町跡 2.大友館跡 3.万寿寺跡 4.上野町・顕徳寺遺跡 5.若宮八幡遺跡 6.東大道遺跡 7.府内城・城下町跡 8.東田室遺跡 9.亀甲山古墳
 10.古宮古墳 11.千人塚古墳 12.永興遺跡 13.羽屋遺跡群 14.金剛宝戒寺跡 15.石明遺跡 16.野口遺跡 17.岩屋寺遺跡 18.弥栄神社 19.金剛宝戒寺
 20.上野廃寺 21.大友上原館跡 22.岩屋寺石仏 23.龍玉畑遺跡 24.元町石仏 25.大臣塚古墳 26.守岡遺跡 27.羽田遺跡群 28.下郡遺跡群

第2節 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

大分はその名称が示すように、平野を丘陵や河川が分断した地形をしており、各所に小規模な平野が展開する。そうした中、大分川の河口付近の左岸から西側にかけて広がる小地域は、中世以降今日に至るまで、政治経済の中心地となる。この地域は、東側を大分川が北流し、北側には別府湾が広がり、南側は高崎山系から東に延びる標高約40～30mの上野丘陵が横たわり、西側は高崎山(628m)へと続く標高100m前後の起伏の激しい丘陵に囲まれている。

府内古図

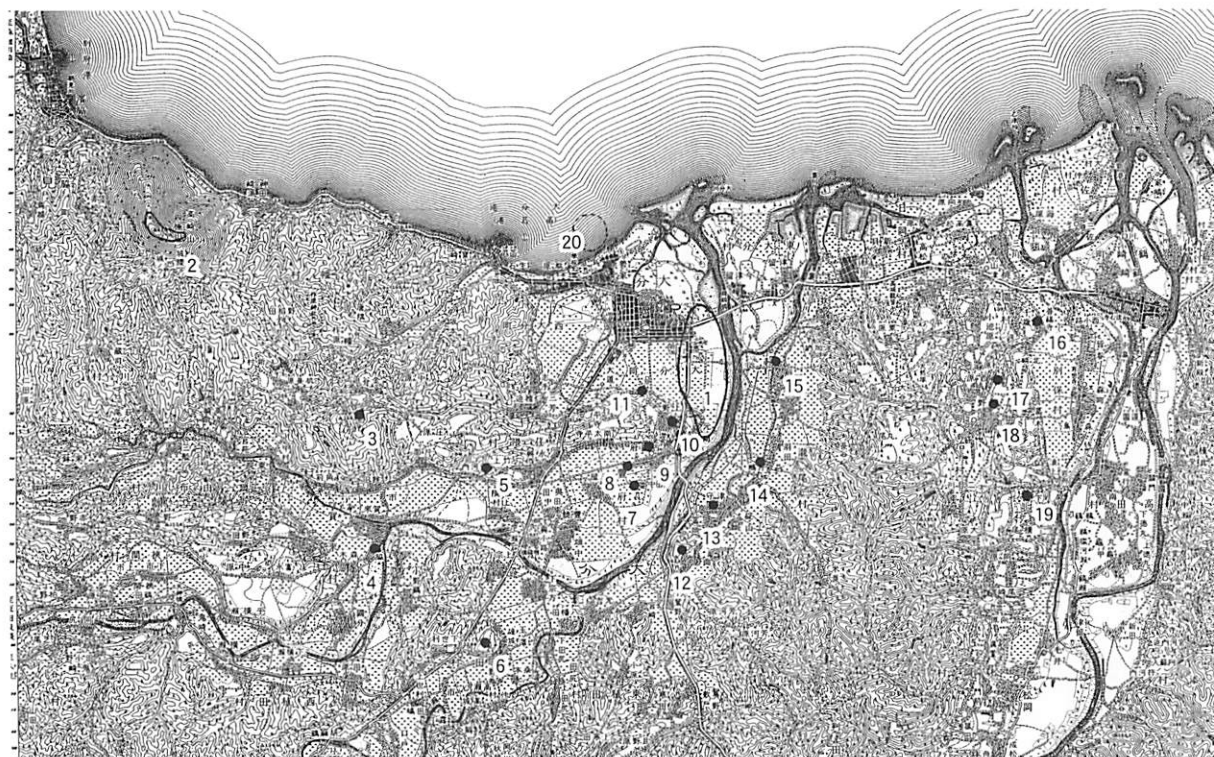
こうした、地域の中で、中世大友城下町跡は東部の大分川沿いに形成された都市遺跡である。府内古図に描かれている範囲は、北は現在に比べ西側に大きく曲がっている河口部から、南は上野丘陵の先端部と大分川が接する部分にあたる。現在の標高は河口に近い北部で約4m、上流の南部地域で約6mの自然堤防上に立地する。

自然堤防

低湿地

北と東側は別府湾と大分川に限られ、遺跡の南西部から西側の限りは、試掘調査の結果や、元地形の観察から、低湿地の広がり確認された。この部分は1950年代までレンコンを栽培していたと伝えられている。この低湿地は上野丘陵の北裾を巡り、北の別府湾方向に伸び、府内古図に描かれる舟入に続いている。

「府内町跡61次調査」この上野丘陵の北側の裾を巡る形湿地部にあたり、一部に微高地が認められるものの、ほぼ全域が水はけの悪い土地柄である。



第3図 中世大友城下町跡の周辺の主要中世遺跡

- 1.中世大友城下町
- 2.高崎城跡
- 3.金谷迫城跡
- 4.賀来氏館跡
- 5.尼ヶ城跡
- 6.雄城城跡
- 7.石明遺跡
- 8.町口遺跡
- 9.岩屋寺遺跡
- 10.大友上原館跡
- 11.東大道遺跡
- 12.守岡城跡
- 13.津守遺跡
- 14.片島遺跡
- 15.下郡遺跡
- 16.千歳城跡
- 17.猪郡新土居遺跡
- 18.猪野中原遺跡
- 19.横尾遺跡
- 20.沖ノ浜(推定)

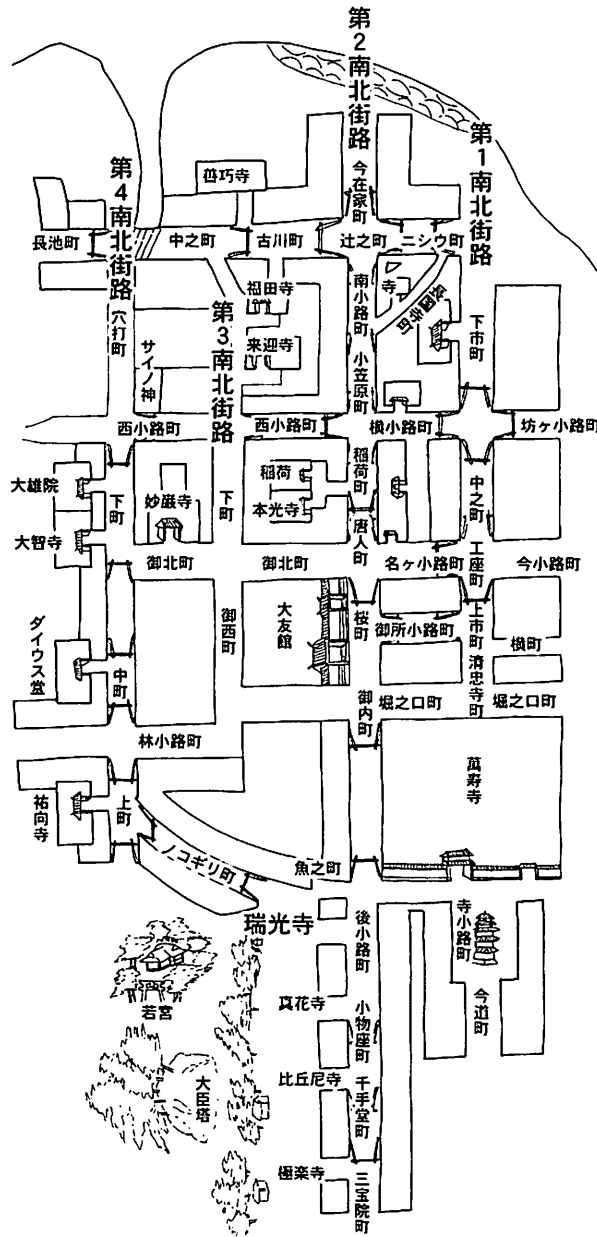
2 歴史的環境

壬申の乱
大分君恵尺
評

別府湾に近い大分川左岸地域の上野丘陵周辺が、豊後のなかでも政治的に特別な地域になるのは7世紀後半からである。まず、上野丘陵北側の奥まった場所に壬申の乱（672年）で大海人皇子（天武天皇）側について活躍した大分君恵尺・稚臣の墓と想定されている畿内系石棺式石室の古宮古墳（国史跡）が築造される。ほぼ同時期の上野丘陵南側では羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡がある。この遺跡からは、7世紀後半～8世紀初頭の方形の掘り方をもつ大型掘立柱建物や総柱の倉庫群が確認されており、「評」段階の遺構と想定されている。

竜王畑遺跡
岩屋寺石仏
元町石仏

その後の設置された豊後国府については、羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡の東側に「古国府」の地名が残るものの、政庁本体は未だ不明である。しかし、上野丘陵上の東端部で調査された竜王畑遺跡では9世紀から10世紀前半にかけての底をもつ掘立柱建物や築地塀跡が検出され、その配置から、国司の館跡の可能性が指摘されている。さらに、この丘陵の東端部の南側崖面に岩屋寺石仏、東側崖面に元町石仏が刻まれており、平安時代後期の藤原様式の作風と言われている。このように上野



第4図 府内古図と街路名称の設定（府内古図A類をトレースし一部改変）

丘陵の南側の羽屋地区から古国府地区、そして上野丘陵東部は7世紀後半から10世紀頃にかけて、豊後の政治の中心地であったと考えられている。

宇佐神領大鏡 11世紀から13世紀代になると、注目される文書が残されている。まず「宇佐神領大鏡」の天喜元年（1053）、康平2年（1059）、承保4年（1077）に「勝津留島四至」として登場する。その示す範囲は、上野丘陵東部から北に広がる沖積地にあたり、16世紀に大友館が置かれる場所が含まれている。その中で天喜元年の申文に西の限りとして「高国府」の地名が見られ、上野丘陵東端部が想定されている。13世紀中頃、大友氏3代目の大友頼泰が豊後に守護職として下向した際、「高（隆）国府」を強引に割譲する。このため「高国府」「勝津留島」については守護所の設置場所と関わる重要な問題となっている。さらに、この申文の中に「東限北廻り、二方市河」とあり、すでに大分川沿いで河原市があり、府内古図に描かれた「府内」の初元的な位置づけがなされている。こうした様子を裏付けるような豊後府中の状況を表す文書がある。それは仁治3年（1242）の新御成敗状で、都市の規範を示す条項が書かれている。このような文書資料では、13世紀代に豊後の中心地である府中が、都市として成立していた様子を示す。

河原市

しかし、こうした状況は考古資料で証明できているわけではない。「勝津留島」の範囲の中で新御成敗状が描く「府中」の状況は現時点で考古学的には不明である。

万寿寺 14世紀代になると、徳治元年（1306）に万寿寺が大分川を東に望む自然堤防上に建立されると、この地域での本格的な町づくりが開始される。これまでの中世大友城下町跡の発掘調査で確認されるのはこの時期からで、以降16世紀中頃から後半に最盛期を迎え、17世紀初頭に「府内」が近世の府内城下町建設に伴い移転するまでの遺物や遺構が継続して発掘されている。

上原館 この時期の遺跡は、府内周辺でも多く確認されている。大分川の右岸にある下郡遺跡群や津守・片島地区でも16世紀の方形館や方形区割りをもつ遺構が確認されている。独立性の強い守岡丘陵には山城的な存在である。一方上野丘陵には土塁と堀を廻らす上原館があり、その南の古国府地区には町口遺跡、北側にも16世紀の遺跡がある。さらに西方の高崎山の山頂は大友氏の詰城として知られている。

「府内町跡61次調査」はこうした「府内」の中で、「府内古図」に描かれる「瑞光寺」の位置にあたる。

第2章 調査の成果

第1節 調査の経緯と概要

1. 調査に至る経緯

大分駅付近連続立体交差事業のJR久大線高架化事業に伴う発掘調査は、平成11年9月に日豊・豊肥線の分岐の試掘調査の実施から始まる。その結果、古代から中世にかけての遺構や遺物が確認され、上野町遺跡として平成12年1月に本調査を実施した。調査の結果、8世紀末から9世紀後半の土師器・土錘をはじめ、中国の長沙窯系の黄釉褐彩水注の破片が出土している。

上野町遺跡
黄釉褐彩水注

その後、平成12年10月にこの地点から、「若宮神社踏切」まで、試掘調査を実施したが、宅地化する際に約1m埋め立てられており、その下部は黒色の泥層となっていた。さらにその部分を約1m掘り下げると、青灰色をした水分を多量に含む砂層が堆積しており、この層も約1m掘削したものの、堆積層に大きな変化はなく、遺物も全く出土しなかった。

試掘場所も「府内古図」に描かれる若宮八幡の北側にあたるものの、町屋からは離れており、遺構・遺物も確認されないことから、本調査の必要はないと判断した。

瑞光寺

平成14年になると、久大線高架化事業の範囲は「若宮神社踏切」からさらに東に350m離れた「初瀬せき下踏切」まで広がり、平成14年9月に久大線の現軌道敷の北側の試掘・確認調査を実施した。その結果、「若宮神社踏切」に近い西側200mは、低湿地が続いていたが、その東側150mの範囲で微高地が確認され、溝や柱穴等の遺構、瓦や土器片等の遺物が確認された。この遺構・遺物が確認された範囲は、「府内古図」を現在の地図上に移し換えた位置では、「瑞光寺」の場所にあたることも判明した。そこで、平成15年5月から10月にかけて発掘調査を「府内町跡31次調査」として実施した。

この久大線高架化事業に伴う「瑞光寺跡」の発掘調査は、現軌道敷の移設と関連するため、以後二度にわたり実施した。平成17年8月から11月にかけて、現軌道敷の南側を「府内町跡61次調査」として発掘調査し、その部分に軌道が移動した。そして、移設した軌道跡を平成18年に「府内町跡71次調査」として平成18年10月から12月まで実施し、久大線高架化事業に伴う「瑞光寺跡」の調査を終了した。

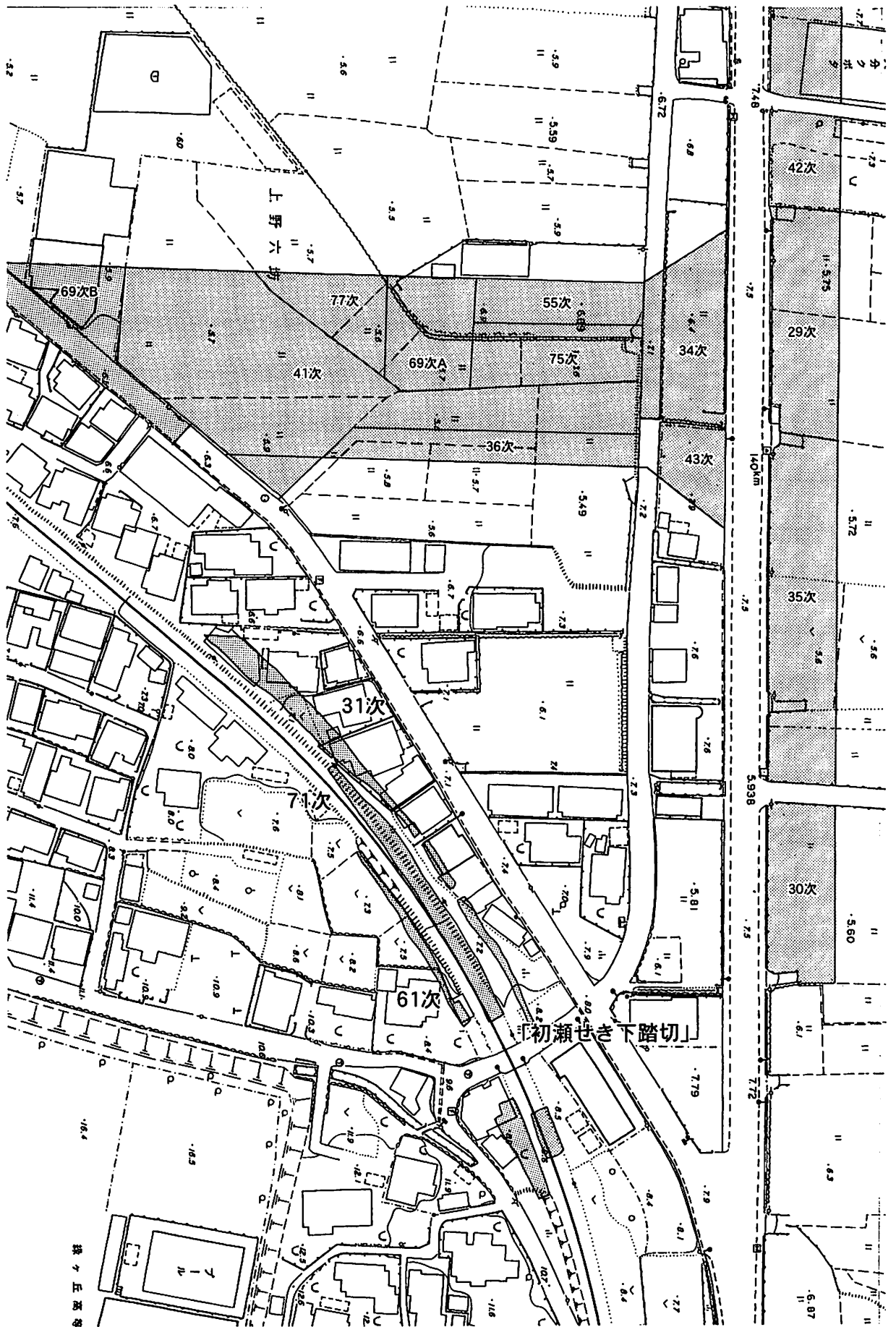
2. 調査の経過と概要

発掘調査は、平成17年8月中旬から開始した。調査区は、軌道沿いであるため、北西から南東に駆けて延びる細長い形状となった。しかも、間に「初瀬せき下踏切」があるため、連続して掘削をすることが出来ず、北西側をⅠ区、南西側をⅡ区として、二つの調査区に分けて発掘することとなった。しかし、国土座標による10m×10mの調査区の設定は、Ⅰ区とⅡ区をカバーし、南北方向に北から75～84、東西方向に西からY・Z・A・B・C・D・Yとした。

発掘調査は、重機による表土剥ぎで開始した。Ⅰ区は表土が畑地で、耕作土の厚さは約30cmで、その下位は黒色をした土層が約20cm堆積していた。この土層を除去すると、中世から近世の遺構が検出される。「府内町跡31次調査」では近世、16世紀代、14・15世紀代と三層に分かれて遺構が検出されたが、「府内町跡61次調査」では、同じ検出面で、この3時期の遺構を検出した。しかし、Ⅰ区の南西部は近世以降の攪乱を受けており、しかも明確な遺構を検出することは出来なかった。このため、遺構の保存状況の比較的良好であった北西部を中心に調査を実施した。

Ⅱ区の調査は、重機による表土除去後に土管の配列などが確認され、表土下約30cmまでは近代の層であることが判明した。しかし、それから下層にかけては、Ⅰ区とは異なり、近世、16世紀代、14・15世紀代の遺構が検出面を異にして検出された。

調査区は、狭小で、北側は列車が通過する状態であったため、作業が困難な部分もあったが、以上の経過を経て、11月中旬に現地の発掘調査を終了した。



第5図 府内町跡61次調査の位置と周辺の調査状況

第2節 I区の遺構と遺物

1. 溝

調査区が狭いため、全ての遺構は全容を把握することができず、溝と細長い土坑の区別は困難であった。そこで、これらの区別は検出された部分の形状から予想して判断した。

SD101

SD101～SD106は調査区の北西隅で検出された遺構である。これらの遺構の方位は、ほぼ東西方向に同じ方向を示しており、同じ目的で掘削された可能性が高い。しかし、深さは浅いものの、形状は微妙に異なる。

SD101はこうした溝の中で、調査区の北端部で検出された比較的幅の広い溝である。幅は45cmを確認でき、深さは5cm前後である。床面は平坦で、断面は皿状になる。

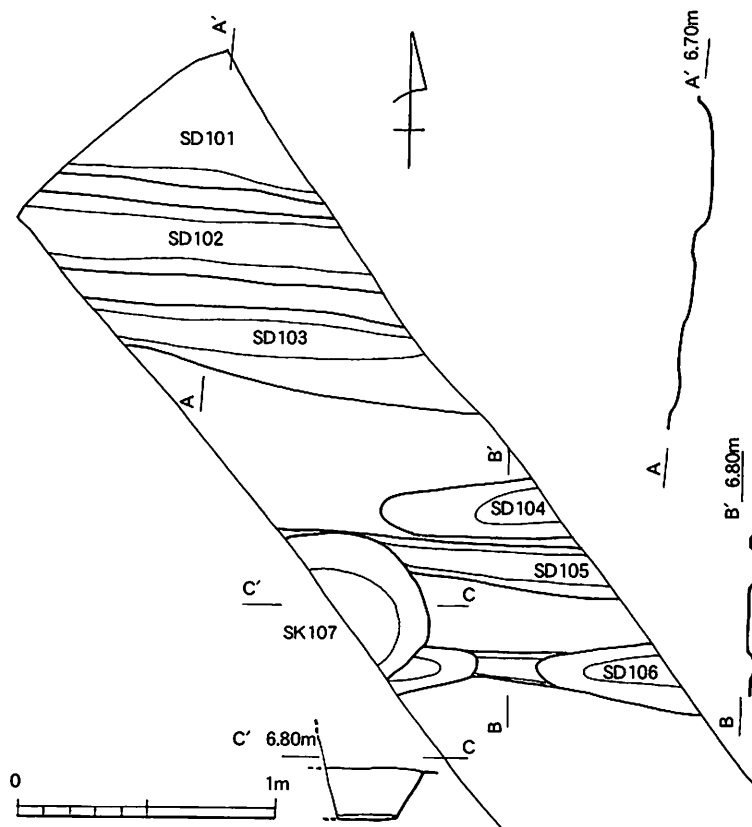
出土遺物として第10図1に図示した14・15世紀代の在地系土師質土器の底部の破片がある。しかし、遺構が浅いため、この他に遺物の出土がなく、時期を決定するには積極的な資料と言えない。

SD102

SD102はSD101の南側に接して並行する溝である。幅は約28cmで深さは、SD101より浅く3cm程度である。形状は溝の南北の肩が平行し、整然としている。床面は平坦で、断面は浅い皿状になる。遺物は遺構が浅いために出土しておらず、時期を決めることは出来ない。

SD103

SD103はSD102の南側に接して並行する溝である。幅は約20cm弱から約30cmで、東側が広い。深さは、SD101よりさらに浅く2cm程度である。形状は検出面からわずかに窪む程度で、溝としての確認も困難な部分もある。床面は平坦で、断面は浅い皿状になる。遺物は遺構が浅いために出土しておらず、時期を決めることは出来ない。



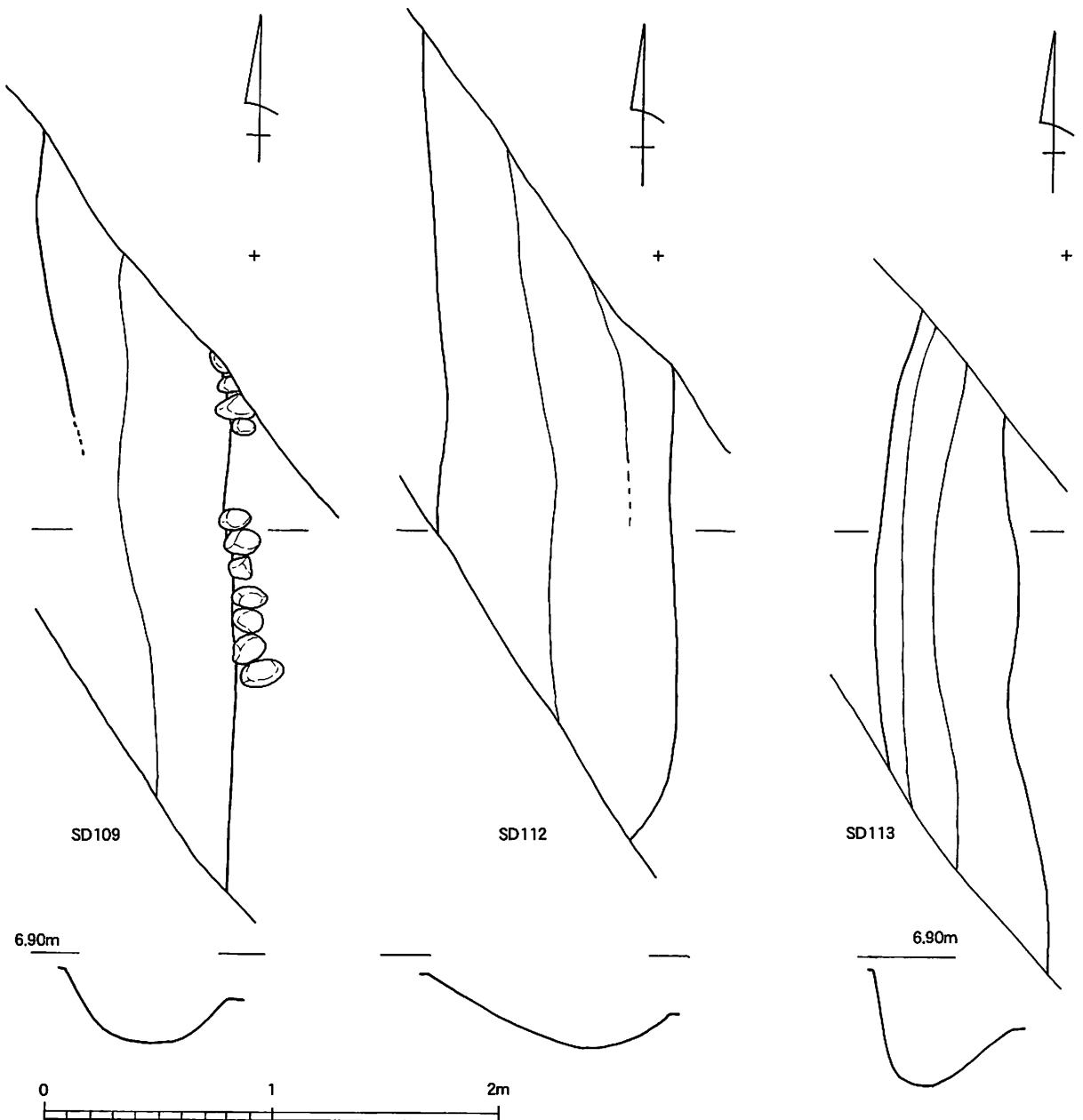
第6図 府内町跡61次調査I区 SD101～106 遺構実測図

SD104

SD104はSD103の南側にわずかに離れて並行する溝と想定される。検出された部分は西端の約80cmで、東に延びる。幅は20cm強で、深さは数cmである。形状は検出面からわずかに窪み、断面は浅い皿状になる。遺物は遺構が浅いために出土しておらず、時期を決めることは出来ない。

SD105

SD105はSD104の南側に接して並行する溝である。幅は約15cmで深さは、SD104と同じく3cm程度である。形状は溝の南北の肩が平行し、次に報告するSD106と比較すると整然としている。床面は平坦で、断面は浅い皿状になる。遺物は遺構が浅いために出土しておらず、時期を決めることは出来ない。



第7図 府内町跡61次調査I区 SD109・SD112・SD113実測図

SD106

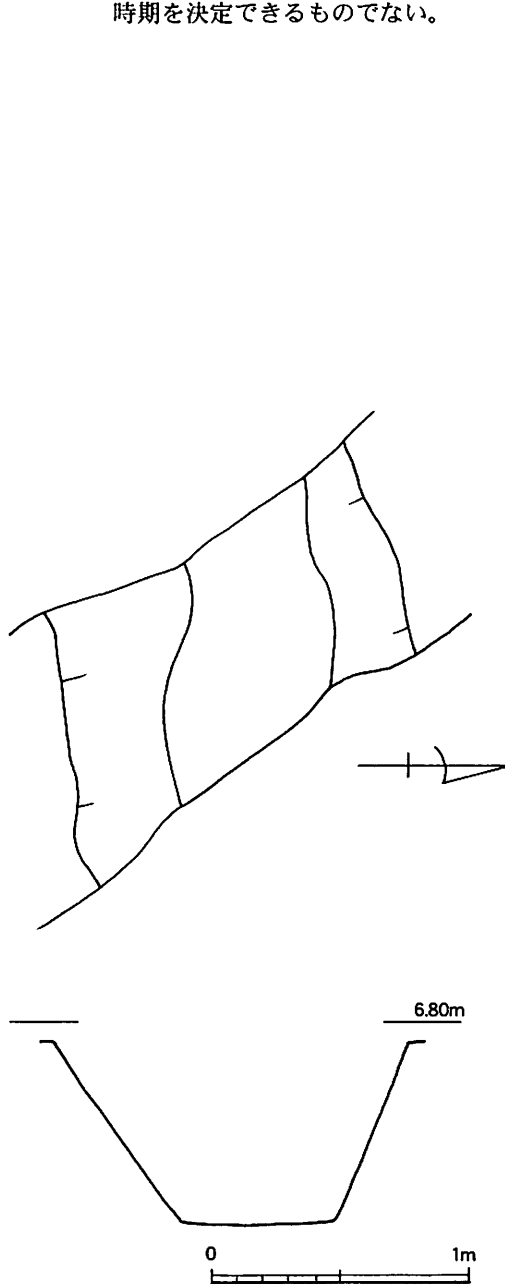
SD106はSD105の南側に約20cm離れて並行する溝である。幅は約10cmから約30cmで、深さは、SD104と同じく3cm程度である。しかし、床面は平坦でなく、検出された範囲の中では東と西の両端が掘り窪められている。遺物は遺構が浅いために出土しておらず、時期を決めることは出来ない。

SD109

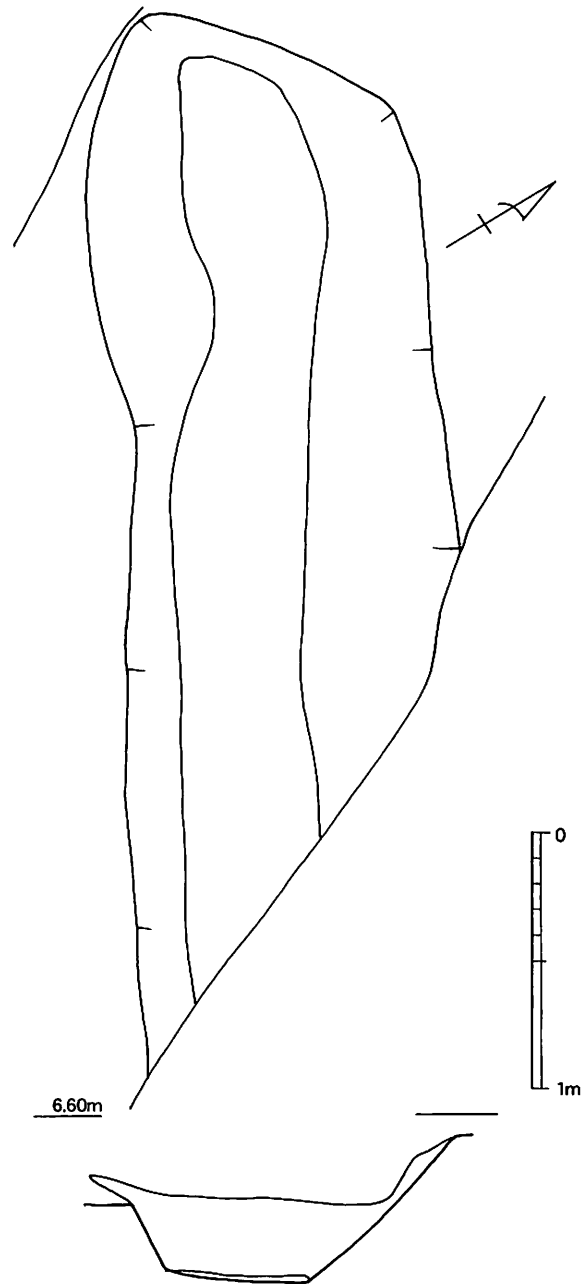
SD109・SD112・SD113の溝は、先に報告したSD101～SD106の南側で検出された。これらの3本の溝はほぼ同じ場所で繰り返され掘削されている。その方位は、SD101～SD106と東側の調査区外で直交するかのように、南北方向を示す。

同じ場所で3度掘り返されたため、遺構の形状を正確に把握することは出来ない。最新段階に掘られたSD109は、西側の肩の一部は不明であるが、西側の掘り込みの肩には拳大の円礫が並べられており、護岸の様子が想定できる。遺構の規模は、幅約70cmで、深さは約40cmである。断面は緩いU字状になる。出土遺物は第10図9があるが、古墳時代から古代の甑の把手であり、遺構の時期を決定できるものでない。

甑の把手



第8図 府内町跡61次調査I区 SD114実測図



第9図 府内町跡61次調査I区 SD115実測図

SD 112

SD 112は、第2段階の掘り込みで、幅が1m強あり、両側の肩は平行する。しかし、南東部の下場は不明である。深さは約30cmで、断面はSD 112より緩いU字状になる。遺構内からは時期を決定できるような遺物は出土しなかった。

SD 113

SD 113は、最古の段階の溝で、幅は約60cmである。方向は南北方向を示すものの、やや蛇行した状況である。深さは約50cmで、西側の掘り込みは傾斜が急であるが、東側はそれに比較すると緩やかである。遺構内からは時期を決定できるような遺物は出土しなかった。

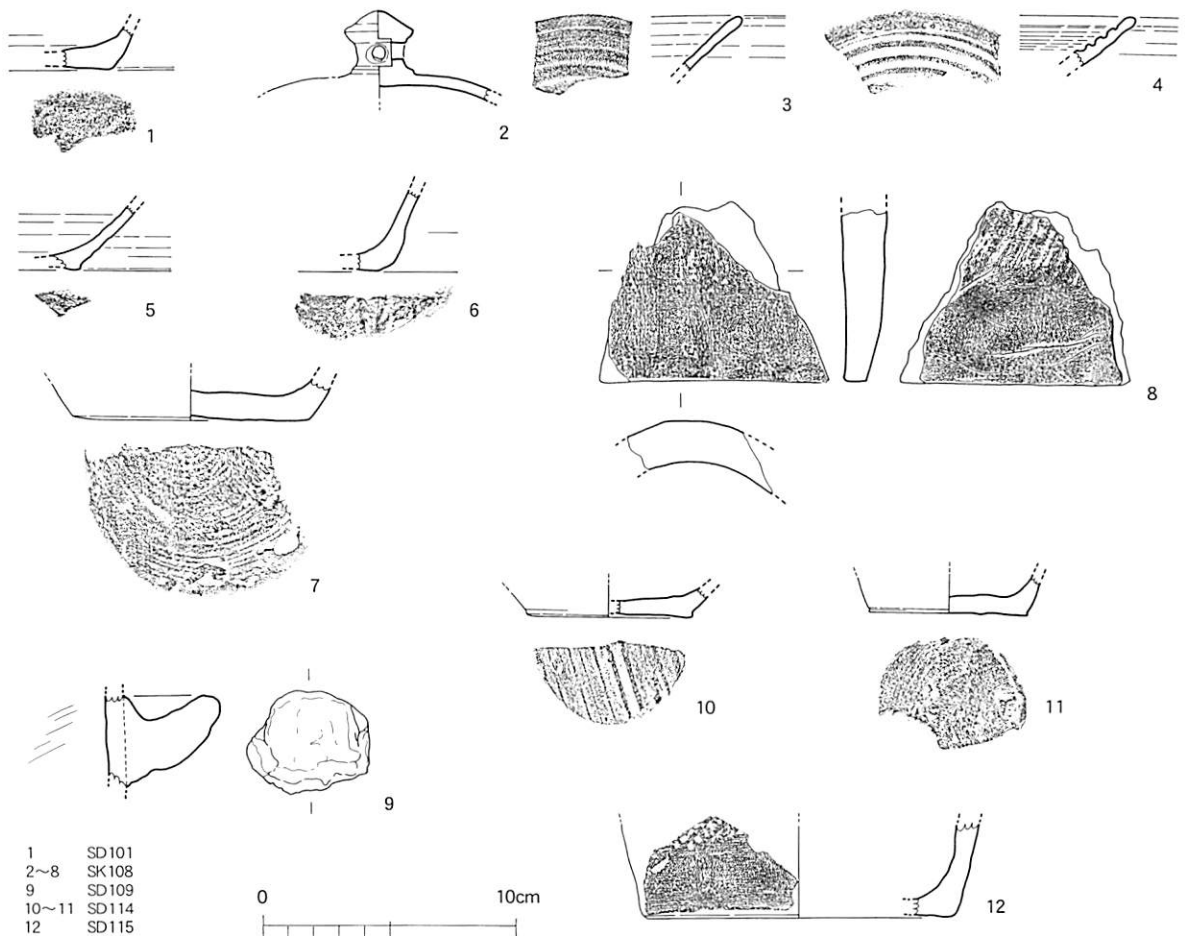
SD 114

SD 114は調査区の北側で、検出された遺構で、東西方向に延びる溝と考える。遺構の規模は、幅1.4m幅、深さ75cmで平坦な床面に達し、その幅は約60cmである。遺構の断面は逆台形をしている。遺構内から出土した遺物は、小破片が多い。第10図10・11は14・15世紀代の在地系の土師質土器の坏である。10には板目圧痕、11には糸切痕が残る。

SD 115

SD 115はI区の中程で検出されたもので、溝状遺構の西端と考える。方位はN-60°-Wで東方向に延びる。遺構の規模は幅が約1.2mで、深さは検出面から約60cmで平坦な床面に達し、底面の幅は約50cmである。断面形態は逆台形である。

遺構内からは出土した遺物は少なく、小破片が多い。第10図12に図示した遺物は、胴部に外面に格子状の叩きがあり、それ以外の部分は横撫でて仕上げている。時期は古代の遺物と考えられ、直接この溝の時期と結びつけることは出来ない。



第 10 図 府内町跡61次調査 I 区 各遺構出土遺物実測図

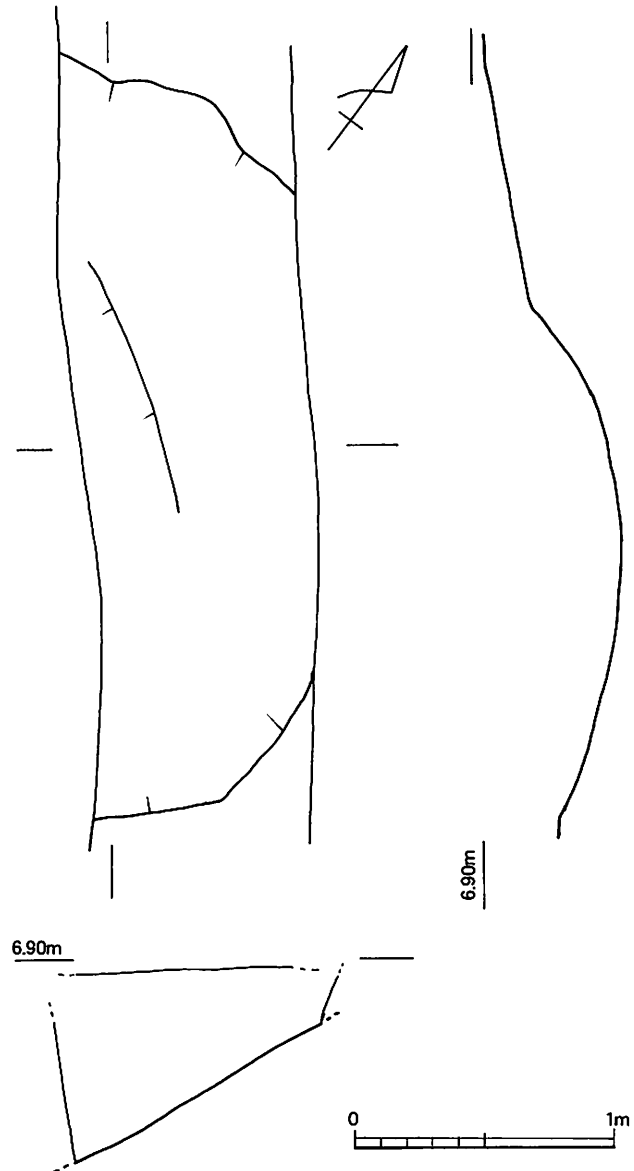
2. 土坑

SK108

SK108はSD114の北側に接して検出された遺構である。調査区が狭小であるため、遺構の全景を把握することは出来ないが、確認できた規模は、直径は3m以上が想定される。形状は遺構の南西部分の掘り方の斜面部分を確認したに過ぎない。こうした状況からこの遺構は、大規模な土坑と考える。

遺構内から出土した遺物は、他の遺構に比較すると多く、第10図2～8に図示した。2は瓦質土器で、横方向の穿孔のある宝珠形の紐を持つ蓋である。器面はヘラで磨かれている。3・4は内面に段を持ち、口縁部が「ハ」の字状に広がる在り系土師質土器の坏である。4の内面には沈線文の調整痕が残る。5は3・4の底部と考える。底面には糸切り痕が残る。これらの3～5の土師質土器は15世紀末から16世紀初頭に属すると考える。6・7は14・15世紀と想定される在り系土師質土器の坏の底部である。底面には糸切り痕が残る。8は丸瓦の先端部の破片である。外面には縄目状の叩き目がありその上から撫でている。内面には斜め方向のコビキ痕が残り、端部にかけて薄くし、横方向の撫でて仕上げられている。

こうした出土遺物から、この遺構の時期を想定すると、古い時期の6・7の資料は混入している可能性が強い。図示した資料には、15世紀末から16世紀初頭の時期と考える3～5の在り系土師質土器があり、遺構はこの時期に機能していたものと考えられる。



第11図 府内町跡61次調査I区 SK108実測図

SK111

SK111はI区の中位で検出された遺構である。この遺構も調査区が狭小であるため全体の形状は把握できない。確認できた規模は調査区内で約10mに亘って、深さ約1mの掘り込みが確認される。

遺構としては大規模な土坑と想定して報告を行う。

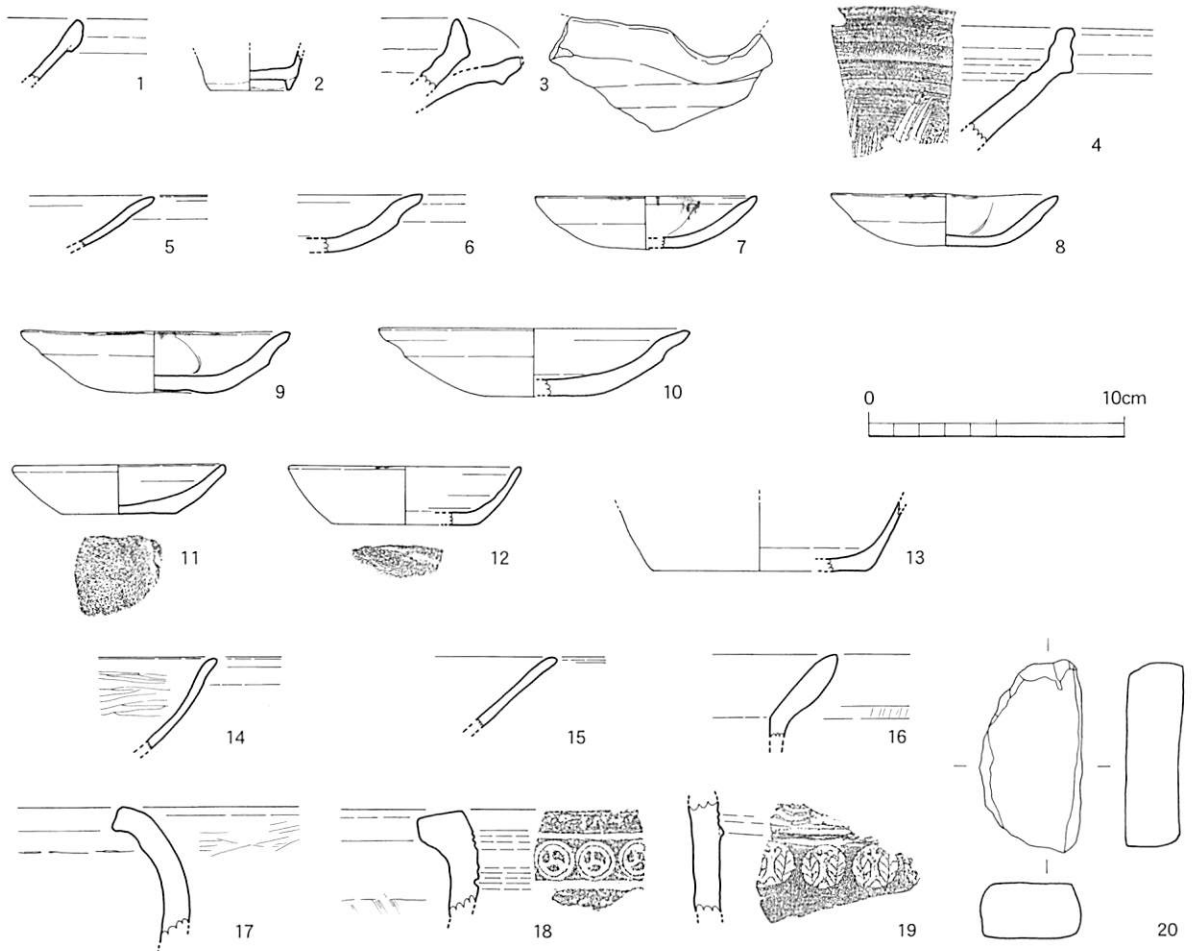
遺構内からは規模が大きいため、瓦をはじめ多くの遺物が出土している。これの主要なものは第12図に図示した。第12図1は口縁部が玉縁の中国産の白磁の碗である。2も中国産の白磁の小杯の底部の資料である。高台を持つ底部の径は3cmで、全面に釉がかけられているが、畳み付き部のみ露胎となっている。3・4は備前焼の播鉢である。3は口縁部断面が三角形になる形態で、注口部の破片である。4は口縁部外面に凹線が数条巡るもので、内面に播目が認められる。3は15世紀代、4は15世紀末から16世紀前半の特徴を持つ。

5～10は京都系土師器である。5・7～9は遺構の下層からの出土である。5は他に比較すると器壁が薄いが、口縁部内外面を撫でて仕上げている。6は器壁が厚く、器高も高い京都系土師器である。口縁部外面は、強く押さえて横撫でて仕上げられるため、凹線状に窪む。7は、口径が8.8cmの京都系土師器の坏である。口縁部の内面には、ススが付着しており、灯明皿として使用されている。

口径8.9cmの8も同じく灯明皿として使用された痕跡が認められる。9も同じく灯明皿として使用された痕跡が残るが、口径は10.5cmと大きい。口縁部の仕上げ方は強い指押さえによる横撫でである。7～9の内面には口縁部を横撫でて一周して上部に引き上げる際に出来る痕跡が認められる。

10は口径12.3cmで口径がもう1段階大きくなるが、器面調整の方法は同じである。

11～12は底部に糸切痕が残る在地系土師質土器の坏である。11は口径8.2cmで、下層からの出土である。12は口径9.2cmで内面は段々が生じている。口縁部にはススが付着しており灯明皿として



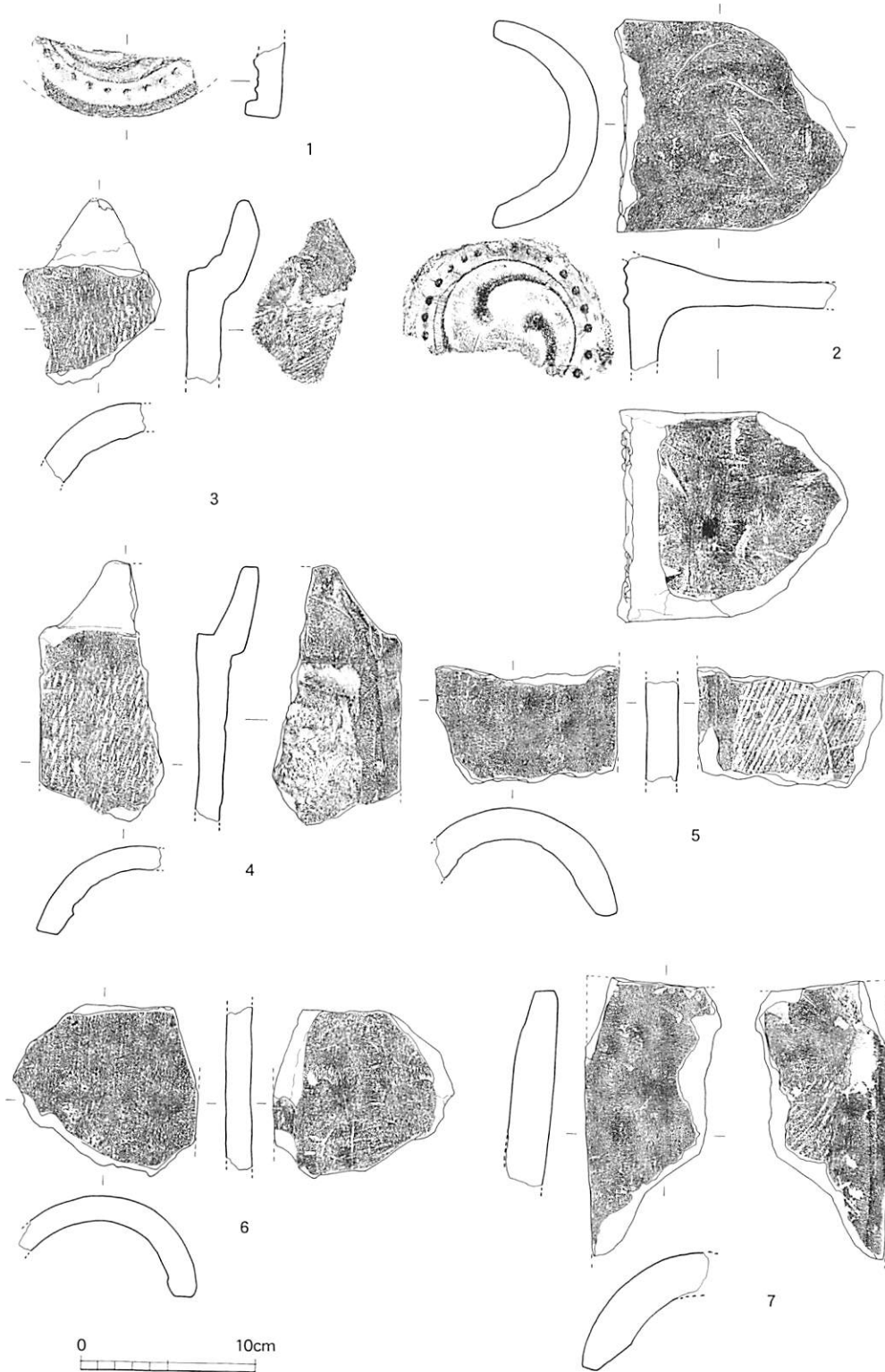
第12図 府内町跡61次調査I区 SK111出土遺物実測図

利用されている。13も底径8.5cmの土師質土器であるが、器形は不明である。

14・15は内外面ともヘラで磨かれた器壁の薄い土師質土器の坏である。8・9世紀の遺物と考える。16は口縁部が肥厚し、断面が紡錘形をし、胴部は直立する土師質土器の土鍋と考える。口縁部は撫で仕上げで、胴部には刷毛目が残る。

瓦質土器

17は口縁部が内湾する瓦質土器である。器壁は磨かれており、色調は黒褐色をしている。18は同じく内湾する口縁部の破片である。瓦質土器であるが、色調は土師質土器に近い。口縁部の内面



第 13 図 府内町跡61次調査 I 区SK111出土丸瓦実測図

は肥厚し、外面には平行沈線が引かれ、その間に巴文のスタンプが連続して施文される。19も瓦質土器の製法で成形されたものであるが、色調は赤褐色をしている。外面には木の葉を二枚文様化したスタンプが連続して施文されている。

20は瓦質土器の破片を半月形に加工したものである。

軒丸瓦

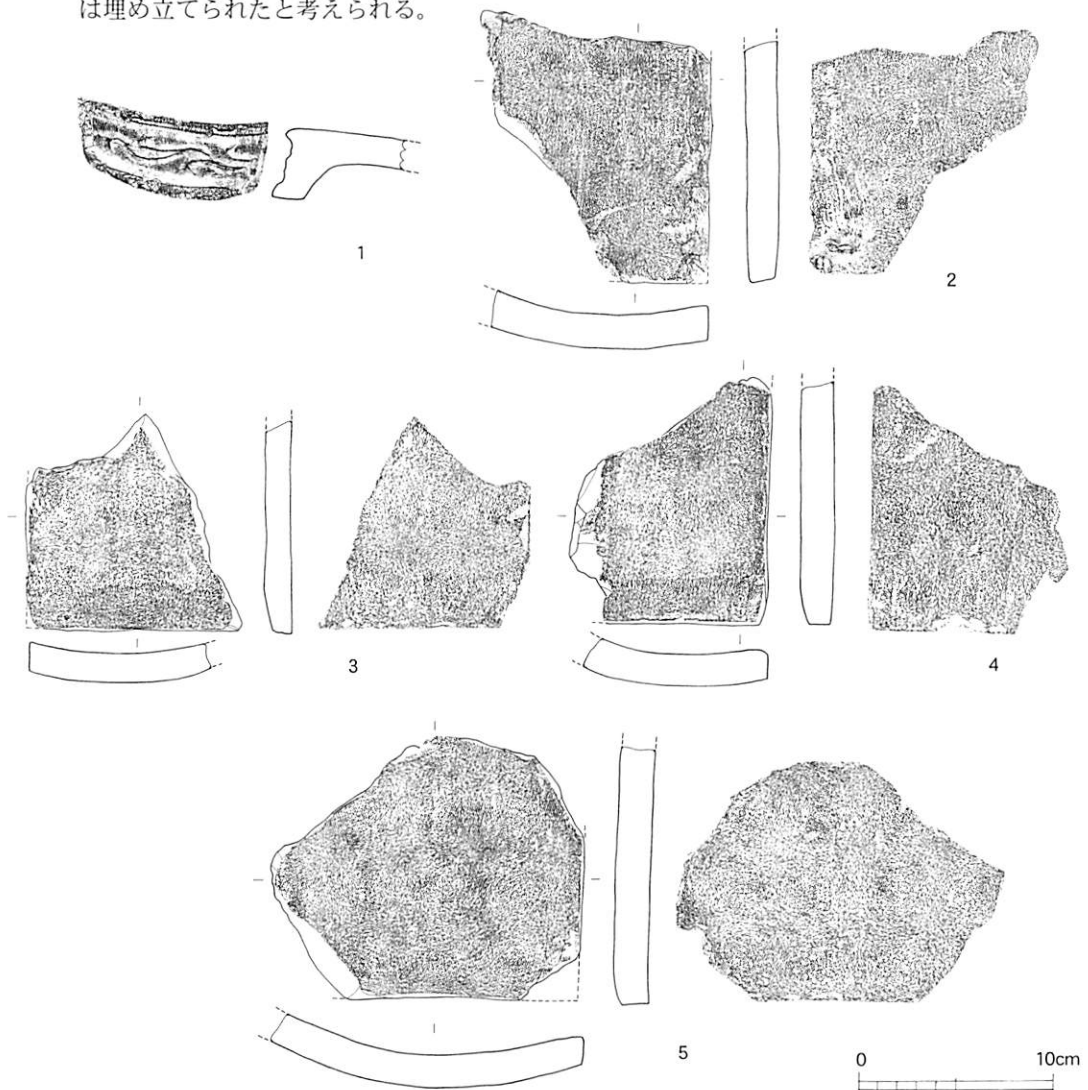
第13図は丸瓦を図示したものである。1・2は巴文と朱文で構成された軒丸瓦である。2の外面は縄目叩きの後撫で、内面は布目痕が残る。3・4は玉縁部分の破片である。両者とも外面には縄目叩きの痕跡が残り、内面には布目痕が認められる。5～7の外面は縄目叩きが認められその後ヘラ撫でで磨り消されている。内面には6に布目痕が認められ、5・7の内面には斜め方向のコビキ痕が残るが、縁辺はヘラによる撫で調整が行われている。いずれの瓦の胎土には角閃石・斜長石・白色粒を含むが、1～3の瓦には石英が目立つ。

軒平瓦

第14図は平瓦を図示したものである。1は瓦頭に唐草文のある軒平瓦である。器面には離れ砂の痕跡が残る。2～5は破片であるが、器面調整は、ヘラによる縦方向の撫でが認められ、さらに器面の内外面には離れ砂と考えられる砂粒が付着している。また3・4の外面の端部には2～2.5cmの幅で、横方向に斜めに面取りをしている。3の胎土には金色の雲母が含まれる。

離れ砂

以上の遺物のほかに、上層からは近世の遺物も出土している。下層から第12図の5～10の京都系土師器が検出されている。これらの遺物は、豊後府内の京都系土師器の編年研究の中で、16世紀後葉～末葉に位置づけられている。このため、SK111はこの時期に近い頃から機能し、近世には埋め立てられたと考えられる。



第 14 図 府内町跡61次調査 I 区SK111出土平瓦実測図

3. 包含層・表土出土遺物

I区からは表土除去作業や遺構検出作業中に多くの遺物が出土した。こうした中から特徴的な遺物を抽出して、第15～18図に図示し、報告する。

第15図1は口径7cm、器高2.5cmの糸切底の在り系土師質土器の坏である。底部から口縁部にかけての器壁は厚く、全体的にずんぐりした観である。2は、口径12.2cmの在り系土師質土器の坏である。底部を欠くが、糸切底であろう。口縁部は底部近くの器壁が厚く、中位でやや薄くなり、口縁部端部は若干肥厚する。3は同じく糸切底の在り系土師質土器の坏の底部である。口縁部を欠くが、口縁部の立ち上がり部分の器壁が厚い。

以上の糸切底の在り系土師質土器の坏の時期は、「豊後府内」の土師質土器の編年研究から見ると、14世紀後半から15世紀初頭と考える。

4はほぼ完形品の在り系土師質土器である。1～3の在り系土師質土器とは異なり、口径10cmに比較し、底径は5.4cmと小さい。それに従い、口縁部は「ハ」の字状に開き、器壁も薄い。内面には、回転による成形のため螺旋状のロクロ目の段が付く。色調は1～3の在り系土師質土器が黄褐色をするのに対し、赤褐色をしている。また、4の口縁部内面にはススが付着しており、灯明皿として利用されている。5は4の形態の在り系土師質土器の底部である。4に比較すると器壁が厚く、底部の外端部と胴部との接合部に段が生じている。

以上の2点の在り系土師質土器の坏の時期は、「豊後府内」の土師質土器の編年研究から見ると、15世紀末葉から16世紀初頭と考えられている。

1～5の在り系土師質土器がロクロ使用の坏であるが、6～9は非ロクロ系の土師質土器で、京都系土師器と呼ばれている。6は底部から口縁部にかけてほぼ同じ器壁の厚さで、器面は横方向のナデで仕上げられ、口唇部は尖っている。7もほぼ同じ作成方法であり、内面には横撫で一周したあと上方に指を引き上げた痕跡がのこされている。8は口径10.2cm、器高1.8cmの法量である。

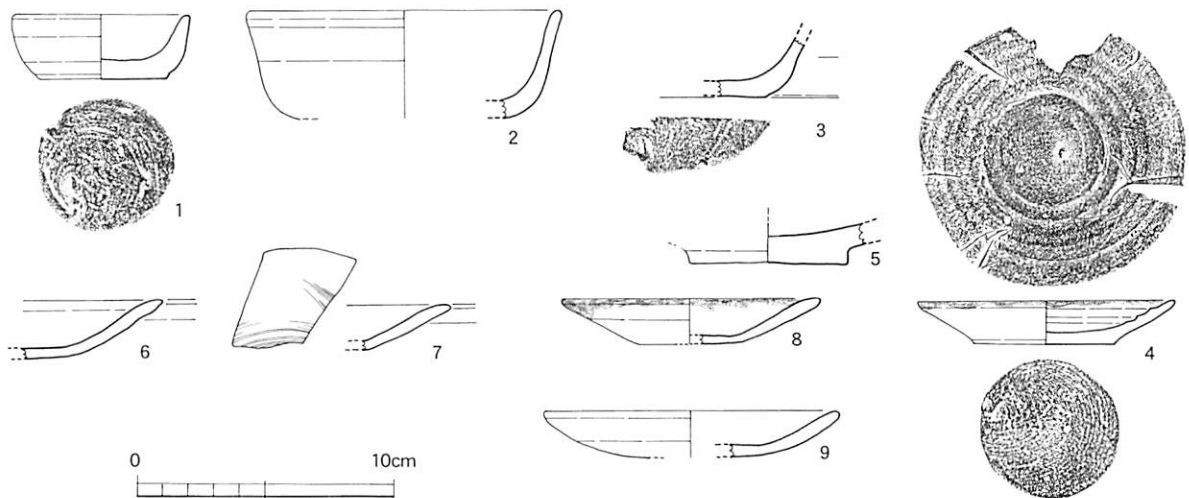
器壁は底部が薄いが口縁部は厚く成形されている。口縁部周辺にはススが付着しており、灯明皿として利用されている。9は口径11.8cmの京都系土師器の坏である。底部に比較すると口縁部の器壁が厚く、口唇部は丸く仕上げられている。

これらの非ロクロ系土師器の坏の色調は、在り系土師質土器が黄褐色や赤褐色をしているのに対し、灰白色をしており、胎土が明らかに異なる。「豊後府内」での京都系土師器の出現は16世紀第3四半期から本格化すると考えられている。17世紀初頭まで作成されるが、器壁が厚くなり、器高も高くなるなど在地化する。そうした中で6～9の資料を見ると、器壁も薄いことから、16

ロクロ目
灯明皿

非ロクロ系

非ロクロ系

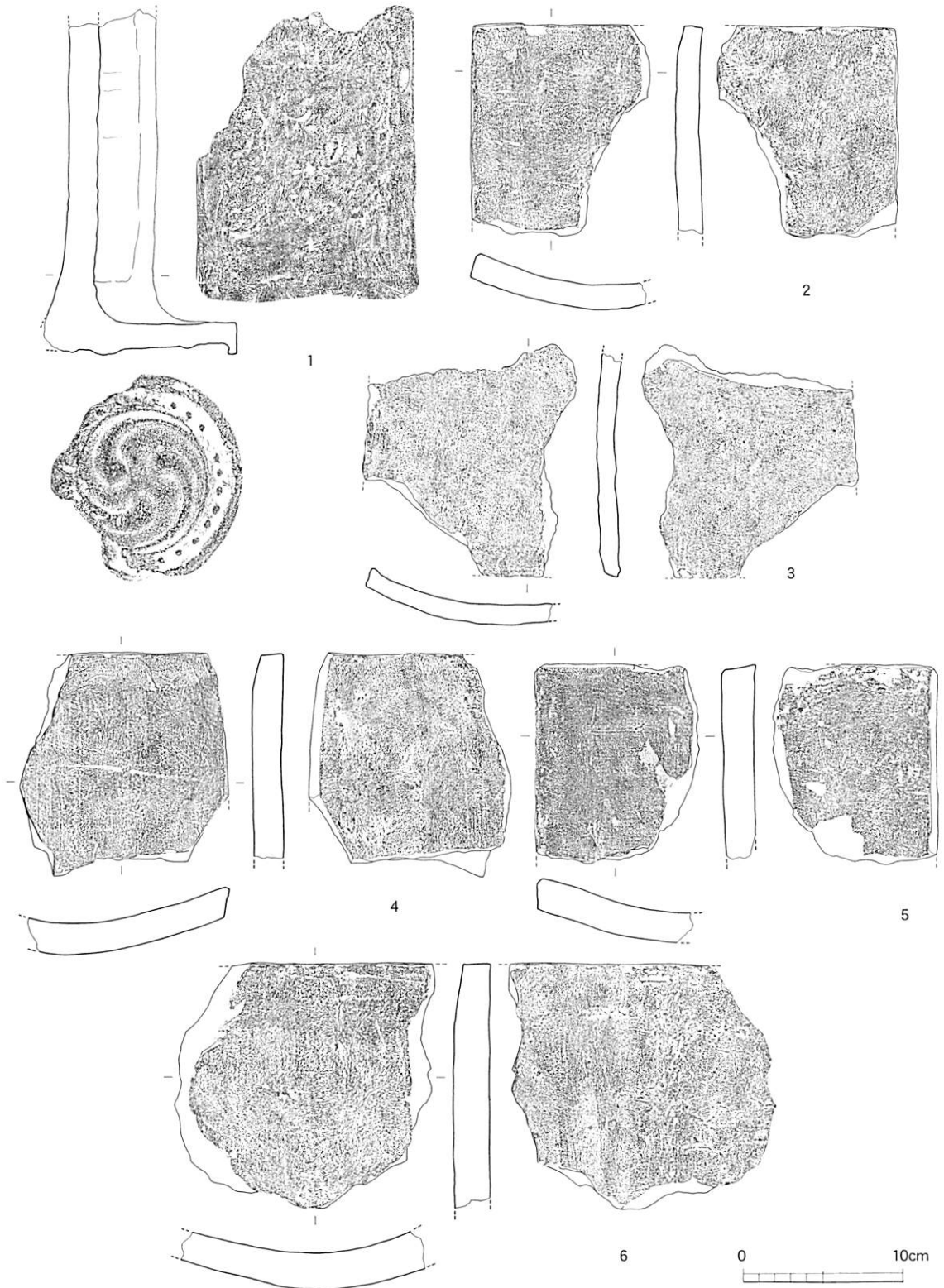


第15図 府内町跡61次調査I区出土遺物実測図

世紀中葉のものとする。

軒丸瓦

第16・17図は出土した瓦類を図示した。第16図1は巴文と珠文で構成される瓦頭を持つ軒丸瓦である。外面は撫で調整で、側面はヘラにより面取りされ、内面はコビキによる条痕が残されている。胎土には石英が目立つ。1以外は平瓦である。2は内外面とも撫でて仕上げられているが、離れ砂と思われる砂粒が付着している。図の上方部にあたる部分を2cm弱の幅で面取りし、わずかに



第16図 府内町跡61次調査I区出土瓦実測図(1)

屈曲するようにしている。3も製法的には2と同様であるが、図の下方部にあたる部分を1.7cmの幅で面取りし、わずかに屈曲するようにしている。4はへら状の工具で全面をナデで仕上げている。瓦の側端部は他の平瓦が断面「コ」の字状にしているのに対し、この瓦は上端部が尖るように作製している。端部の面取りは2cm強の幅で横撫でするように仕上げている。

5も外面はへら状の工具で全面撫で仕上げで、図の上方部は他の平瓦ほど明瞭な面取りではないが、約2cmの幅で横方向になでられており、それを意識している。6もへら状の工具による撫で仕上げられ、端部の面取りは他の瓦に比較すると幅が広く約4cmが横撫でされている。

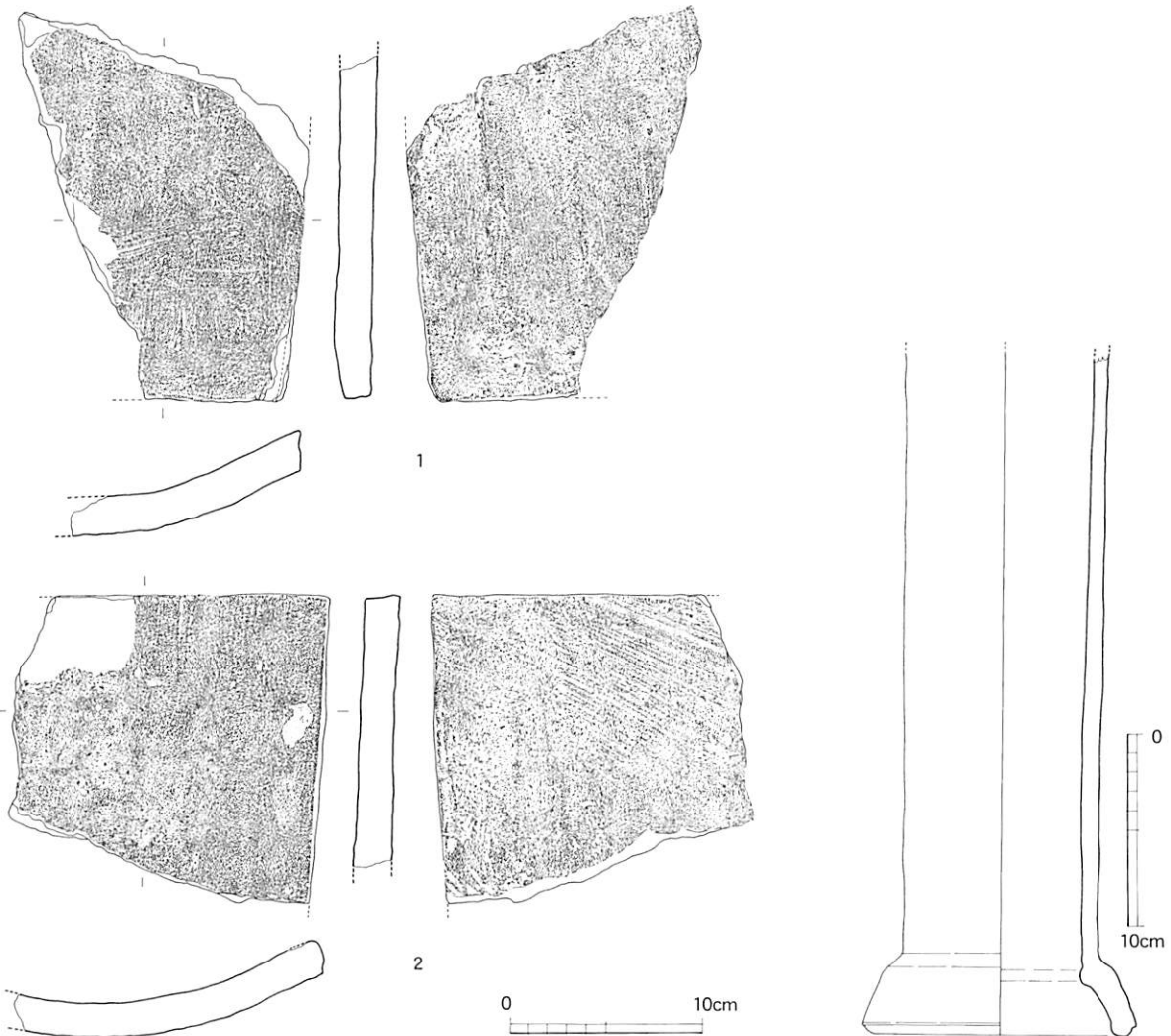
第17図1・2も平瓦であるが、1の外面は不定方向の撫で仕上げで、図の下方の面取りは約3cmの幅で横撫でされている。また外面はへら状工具で縦方向に撫でられ、側縁部は上端が尖るように成形されている。2の外面は縦方向に撫で成形されており、内面は斜め方向のコビキによる条痕が認められる。外面の端部には面取りは観察されない。

コビキ痕

瓦類は、破片が多く時期を明確にすることはできないが、「府内古図」に記載されている瑞光寺に関連することは間違いない。軒瓦の文様等は万寿寺跡から出土する瓦に類似しており、14世紀代の可能性がある。

土管

第18図に表土直下に敷設していた近代の土管を図示した。日本における土管の出現は江戸時代に遡る可能性が論じられており、明治・大正期になって、常滑や瀬戸・美濃等の窯業地で土管が生産されたと言われている。



第17図 府内町跡61次調査I区出土瓦実測図(2)

第18図 府内町跡61次調査I区出土土管実測図

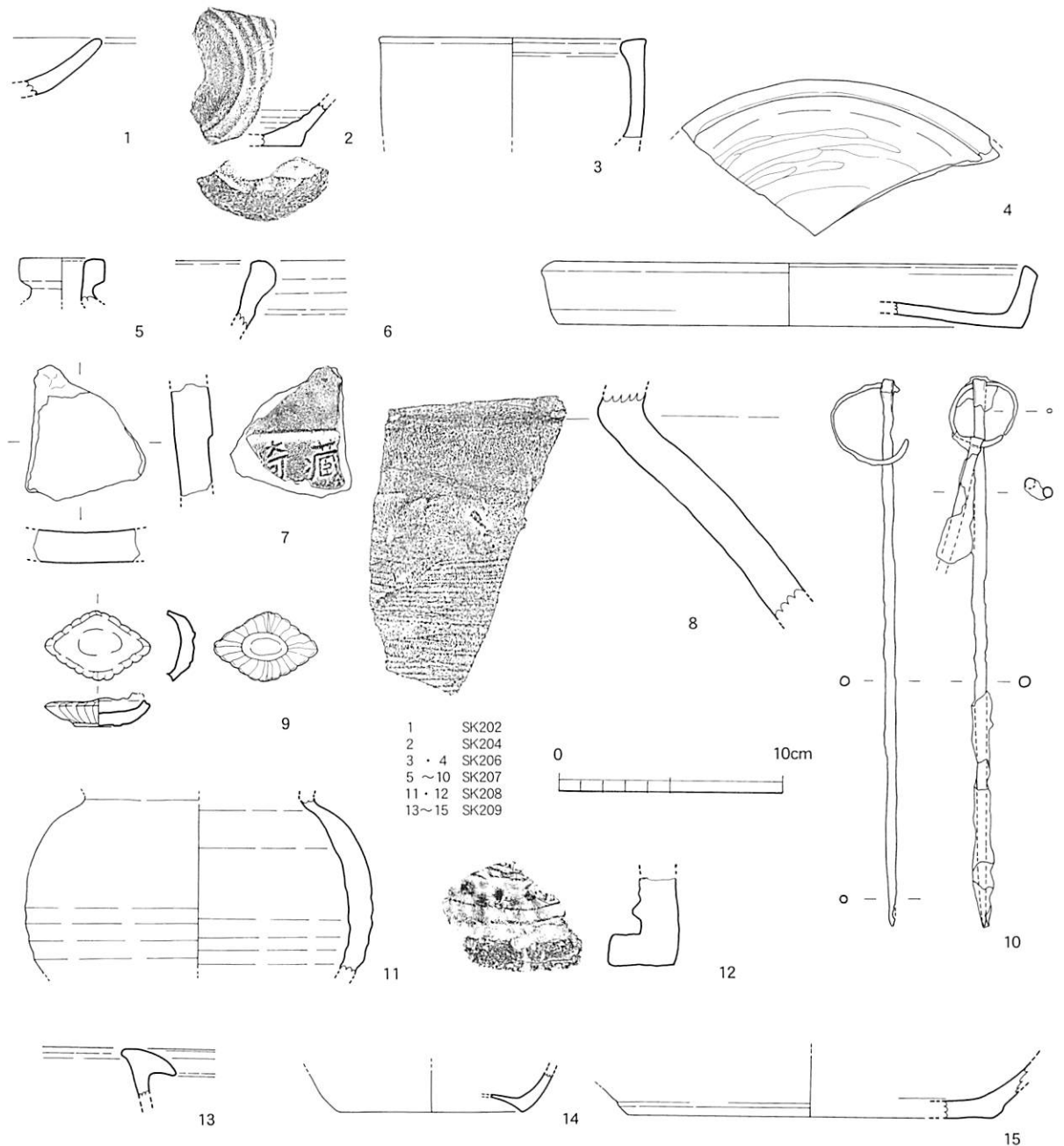
第3節 II区の遺構と遺物

府内町跡61次調査のII区は「初瀬せき下踏切」の南側を約120m発掘調査したものである。I区の遺構検出面がほぼ1面でそこに、14世紀代から16世紀代の遺構が確認されたが、II区は層位的に3面が確認され、それぞれで遺構が検出された。

1. 土坑

表土除去後に検出された第1面の遺構はSD205・SK211・SK212で、土管の配列なども検出された。次に検出された第2面の遺構がSK210・SK215である。SK215の上面には石敷きが認められた他、幾つかの柱穴も確認された。そして、第3面で検出されたのがSK217である。

現代の遺構 こうした状況は付図2に図示した。遺物は第19図に図示したがSK201～204は現代の遺構である。



第19図 府内町跡61次調査II区遺構出土遺物実測図

SK202

SK202とSK201は表土直下で検出した土坑で、当初区別したが、同じ遺構であると判断した。出土遺物は第19図1の16世紀後葉と想定される京都系土師器の口縁部の破片がある。

SK204

SK204も表土直下で検出された遺構である。2は出土遺物であるが、内面に段が付く在地系土師質土器で、15世紀末～16世紀前葉と考える。

以上二つの遺構は、古い遺物が出土しているが、現代の攪乱層である。

SD205

近世

SD205は第1面の北から南側にかけて検出された幅40cm～60cm、深さ約10cmの溝で、途中で削平により消滅している。遺構内からの遺物は極めて少なく時期を決めることは出来ないが、近世に可能性が高い。

SK206

香炉

SK206は調査区の東壁沿いで検出された土坑である。遺物は3・4が出土しているが、いずれも瓦質土器である。3は口径12.1cmで橙褐色をし、内面が肥厚する。香炉の可能性が高い。4は内面をヘラ磨きした口径21.2cmの盤である。色調は暗灰色をしている。

SK207

備前焼

ガラス製品

鉄箸

SK207はSK206の南側で検出された土坑である。主要な出土遺物は5～10で、5は口縁外端部の径が3.7cmの口縁部が肥厚した白磁の壺である。6は備前焼の鉢と考える。7は「奇蔵」の字が見える文字瓦である。8は備前焼の大甕の肩部である。9はガラス製品である。10は鉄輪で繋がる長さ24.4cmの二本の鉄箸である。時期は新旧の遺物が認められるが、近代の遺構と考える。

SK208

瓦頭

SK208はSK207に含まれる土坑である。出土遺物の11は備前焼の壺である。12は軒丸瓦の瓦頭で、珠文と巴文の一部が認められる。

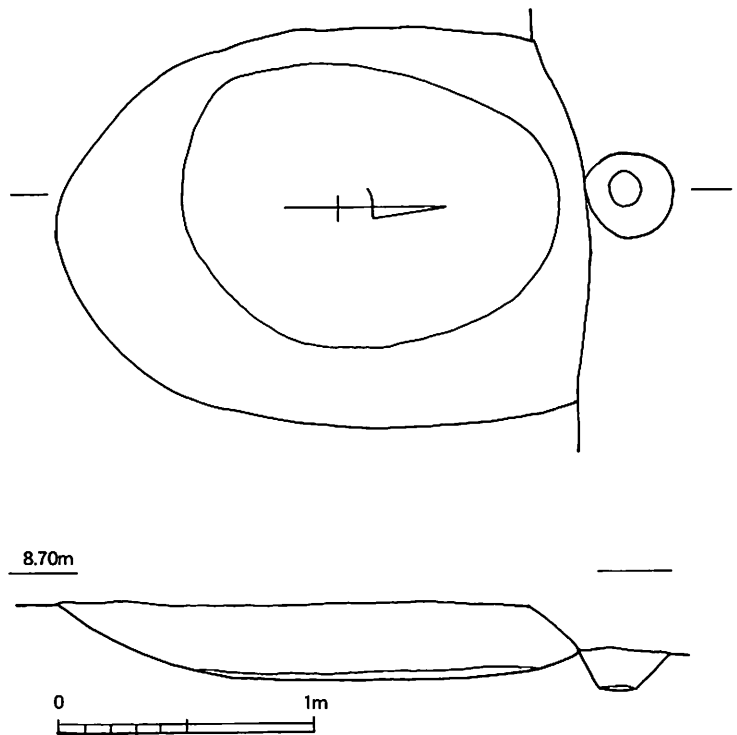
SK209

船徳利

SK209は土管の配列周辺の土坑で現代の攪乱層である。出土遺物は13～15で、13は口縁部がT字状になった瓦質土器である。14は底径8.2cmの須恵質で器壁も薄く、朝鮮王朝産の船徳利と考える。15は底径16.3cmの瓦質土器の底部である。

SK210

SK210はSK204に北側を切られる土坑である。東西1.6m、南北2.1m以上の楕円形をした土坑で、深さは最大で30cm強である。床面も東西1.1m、南北1.5mで、中央が緩く窪むため、断面は丸底の皿状をしている。



第20図 府内町跡61次調査Ⅱ区 SK210実測図

主要な出土遺物は、第21・22図に図示した。1～10は内面に回転を利用した螺旋状の段が生じた在地系土師質土器である。1は小型の皿状の器形で、下層から出土した。2・3も下層出土の口縁部で、2の口径は11.9cmである。4は底部から口縁部にかけての資料である。底部は厚く、口縁部への立ち上がりとの境に段が付く。5は口径7.7cmで、1に比較すると大きい、次の6より小さい。口縁部にはススが付着し灯明皿として使用されている。6は上層出土で、口径は12cmである。7の底部から口縁部の資料と同様、口縁部への立ち上がりとの境に段が付く。8～10は底部の資料である。

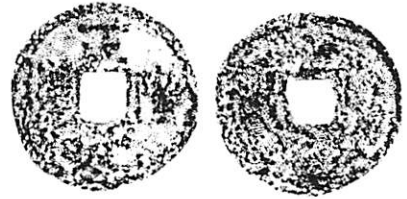
灯明皿

11は外面に菊花文の連続スタンプ文が施文された瓦質土器である。12・13は同一個体の可能性が強い。口縁部が屈曲し、先端部が立ち上がる。胴部外面には連続した沈線文が巡る鉢形の瓦質土器である。14は外面に布目、内面に格子目叩きのある古代の平瓦である。

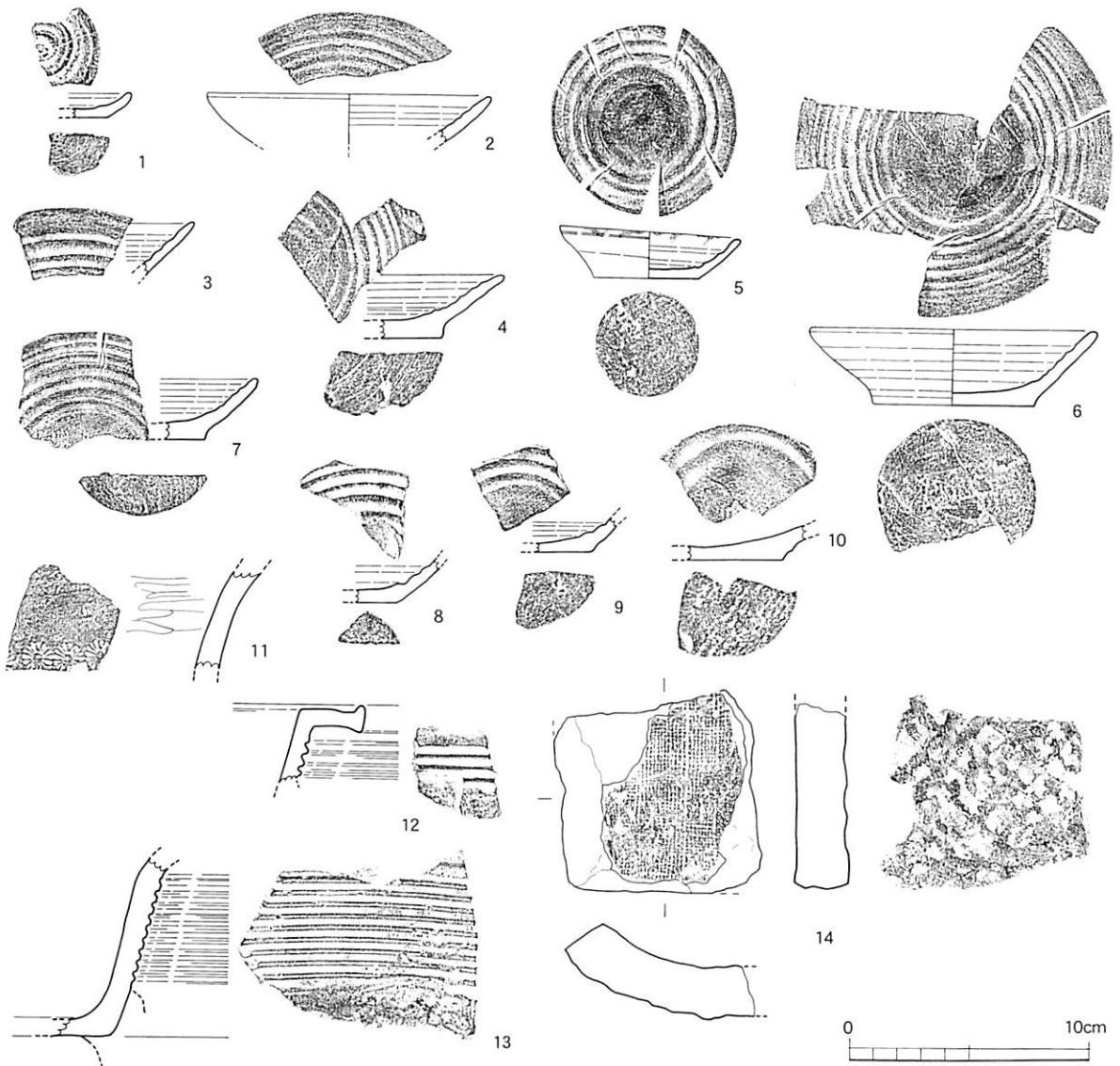
古代の平瓦
銅銭

第21図は出土した銅銭である。「正隆元寶」で初鑄年代は1157年である。

SK210は1～10の資料から、15世紀末から16世紀初頭と考える。



第21図 府内町跡61次調査Ⅱ区 SK210出土銅銭実測図



第22図 府内町跡61次調査Ⅱ区 SK210出土遺物実測図

SK211

瓦質土器

SK211はSK212を切って掘り込まれた遺構である。南北70cm、東西50cmの規模で、深さは検出面から35cmで床面に達する。床面近くからは扁平な川原石が検出された他、まとまった状態で瓦質土器の鉢が出土した。その遺物は第24図に図示した。

1はほぼ完形品になる。口径は24.8cm、器高19.6cm、胴部最大径28.6cmで、口縁内端部は肥厚する。器面は口縁部周辺が横撫で、内面は同心円叩き、外面は横方向の掻き目状の調整痕が残る。色調は灰色である。

製塩土器

2・4は製塩土器である。2の口縁部の資料には、外面に指圧痕が残り、内湾する。4は口径11.6cmで、器形は胴部が張らず、口縁部へと直線的につながり、口縁端部は尖る。外面は指圧痕が残り、手捏ねで製作するためか、口縁部は不整形である。胎土には石英を多く含む。

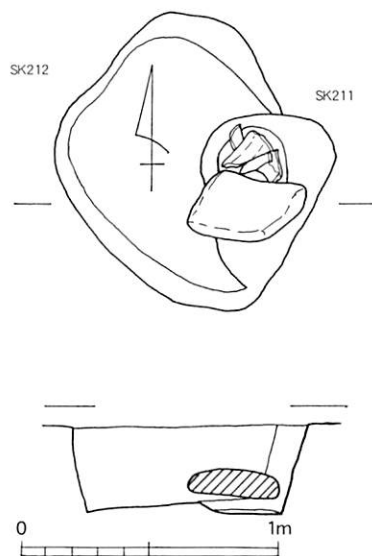
3は胎土に石英を多く含み、色調も淡黄橙色で、製塩時と類似するが、器壁が厚い。口縁部である器面は横撫でである。5は底径6.8cmの弥生時代中期の甕形土器の底部の資料である。器面は縦方向の刷毛目調整が認められる。

SK212

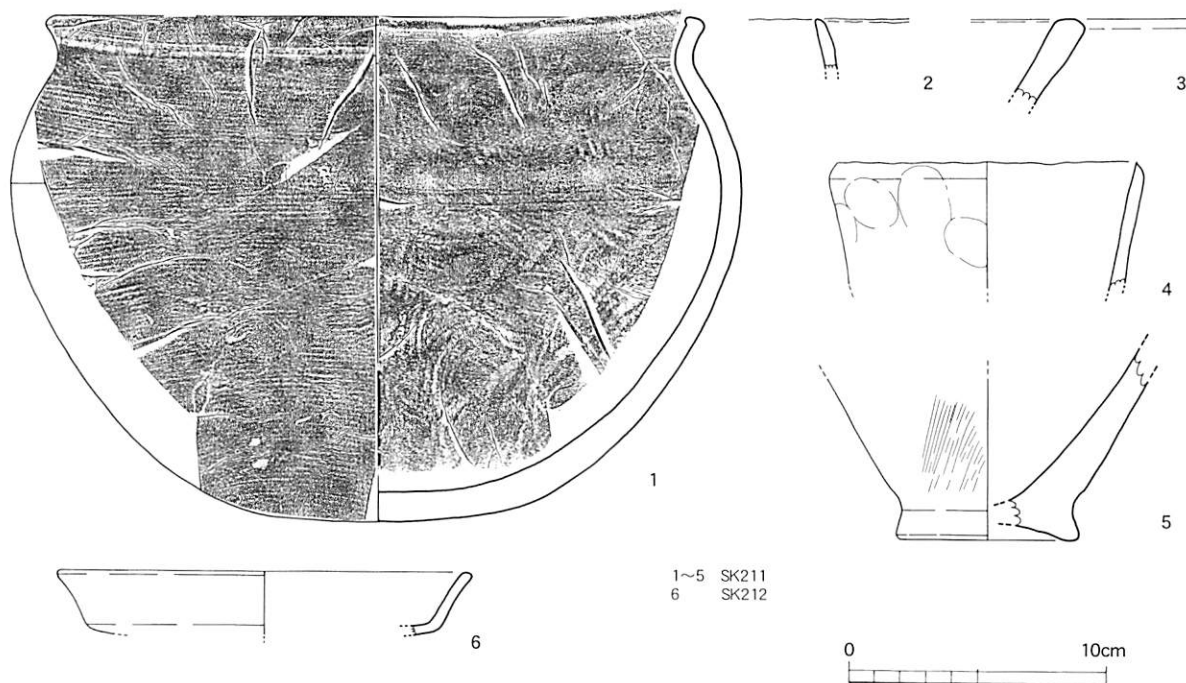
SK212は南北1.13m、東西約90cmの土坑で、深さは検出面から約30cmである。床面は平坦で、周辺の壁は垂直に近く立ち上がる。

盤

出土遺物は、第24図6に1点のみ図示した。この遺物は、口径16.2cmの土師器の盤で、口縁部から底部にかけての器面調整は横撫でである。古代の遺物の可能性が強い。



第23図 府内町跡61次調査Ⅱ区 SK211・SK212実測図



第24図 府内町跡61次調査Ⅱ区SK211・212出土遺物実測図

SK215

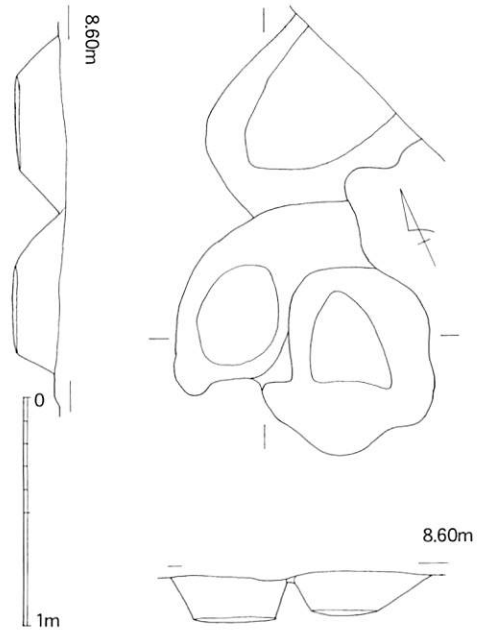
SK215は調査区の南端で検出された、3基の土坑が掘りこまれた遺構である。図示していないが、上面では礫群が検出されている。

第26と27図は上面の礫群と土坑内から出土した遺物である。第26図1・2は京都系土師器である。口径は1が8.2cm、2は12cmである。手捏ねであるため、1の内面には横撫での後、上方に指を引上げた痕跡が残る。

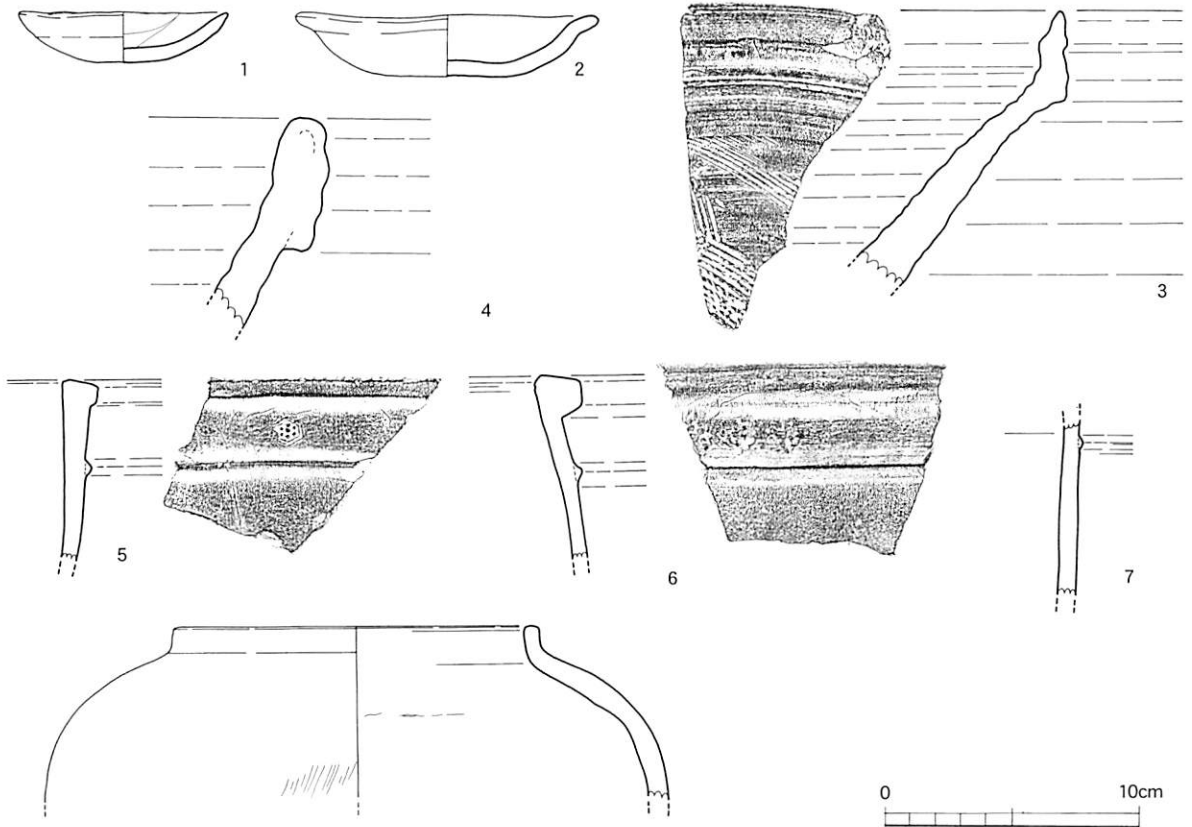
3・4は備前焼である。3は挿鉢で、口縁部外面には複数の凹線が巡り、口縁部内端部も窪む。内面の挿り目は、斜め方向で他の挿り目と交差する。4は大甕の口縁部で、玉縁状に肥厚した口縁部外面には3条の凹線が巡る。

5～7は瓦質土器である。5・6の直線的に立つ口縁部は、先端が外側に肥厚し、その下位に断面三角形の細い突帯が巡る。5は口縁部と突帯の間にスタンプ文が認められる。7は三角突帯から下位の破片である。これらは火鉢と考える。8は口縁部が直口する口径14.4cmの瓦質土器の壺である。器面は横撫でであるが、胴部の一部に刷毛目が認められる。

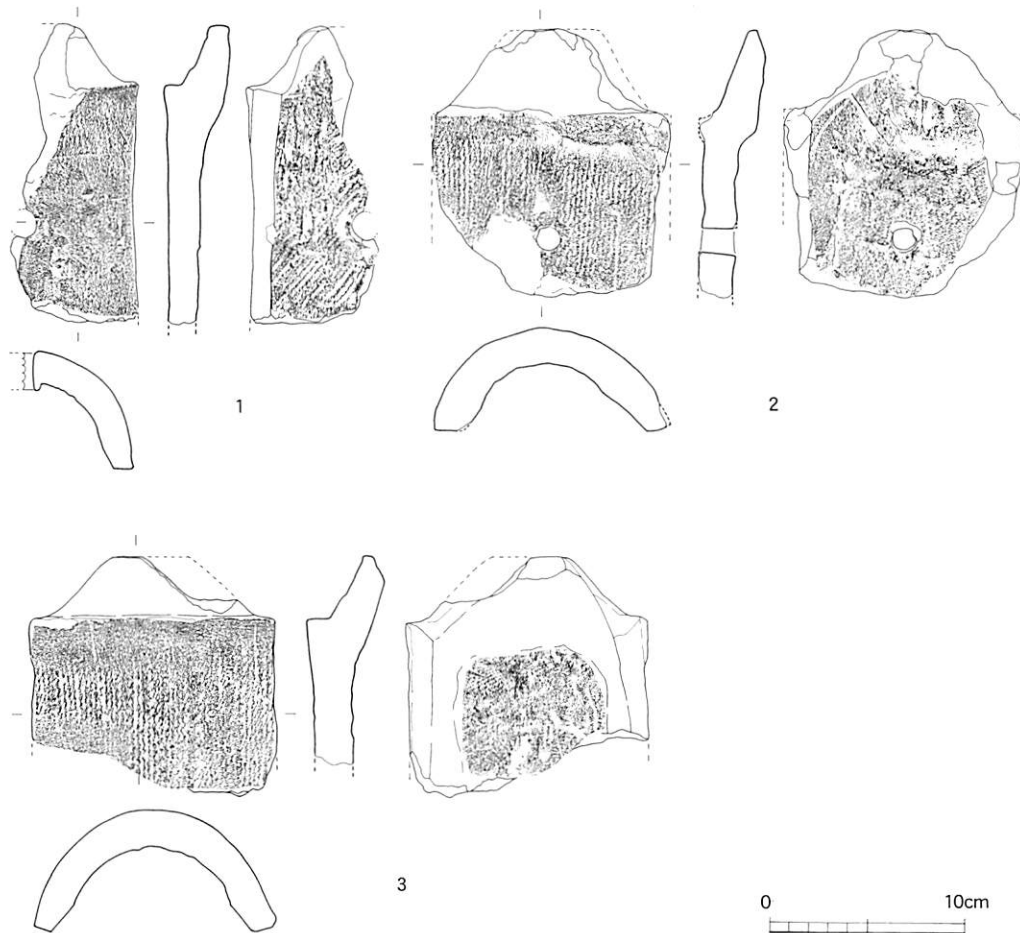
第27図は出土した丸瓦を3点図示した。いずれも玉縁部分で、外面には縄目叩きが認められ、内面にはコビキ痕や布目が観察される。幅が判明する



第25図 府内町跡61次調査Ⅱ区SK215実測図



第26図 府内町跡61次調査Ⅱ区SK215出土遺物実測図 8



第 27 図 府内町跡61次調査Ⅱ区SK215出土丸瓦実測図

2は11.8cmで、1と2には中央部に釘穴を穿孔している。

出土遺物からSK215は16世紀後葉から末葉と考える。

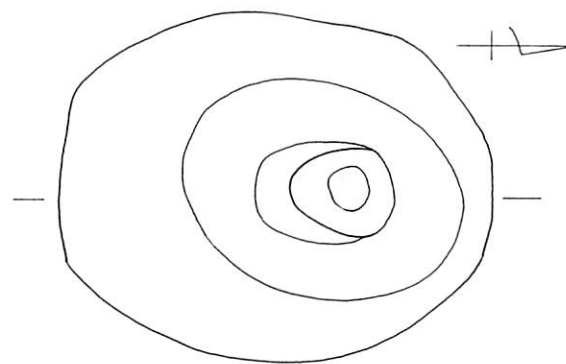
SK217

SK217は三段堀された土坑である。遺構の規模は検出面で南北1.7m、東西1.35mの楕円形をしている。深さは85cmで、最深部は直径約17cmの柱穴状になっている。

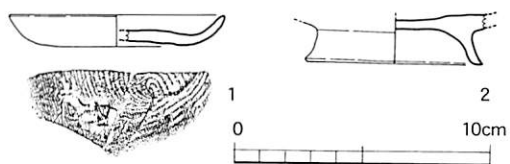
出土遺物は第28図に図示した。1は糸切底の在地系土師質土器の皿である。口径は8.4cmである。2は径7cmの高台を持つ土師器の盤と考える。

SK217は1の遺物から14世紀代と考える。

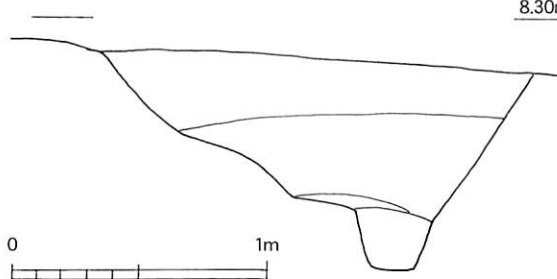
高台付盤



8.30m



第 28 図 府内町跡61次調査Ⅱ区SK217出土遺物実測図



第 29 図 府内町跡61次調査Ⅱ区SK217実測図

2. 包含層・表土出土遺物

Ⅱ区の表土除去や遺構検出作業中に多くの遺物が出土し、第30～33図に図示した。

寛永通寶

第30図は表土中から出土した寛永通寶である。第31図の1～6は京都系土師器である。1～4は横撫でで仕上げられて口縁部の破片である。5は器壁が厚く、口径は12.6cmである。6は口径12.9cmで、底部に比べ口縁部のみ器壁が厚い。

ロクロ目

7～14は内部にロクロ回転による螺旋状の段が生じている糸切底の在り系土師質土器である。7は口縁部のみ、8は底部から口縁部にかけての資料で、10・11は底部の破片である。口径が復元できる9は12cm、12は11.8cmであるが、13は口径10.6cmと小さく、内面のロクロ目の顕著ではない。口唇部周辺にはスガが付着し、灯明皿として使用された痕跡が残る。14は口径13cmと大きい器高は低い。底部には板目状の圧痕が付着する。

緑釉

15～19は底部が糸切底の在り系土師質土器である。器形は16が口径8.3cm、18が9.4cmの皿であるが、17・19は器高が高く、19の口径は12.4cmと大型で、坏と考える。

20は脚または高台が付く坏と考える。器面は横撫でで仕上げられている。

21・22の器形は脚または高台が付く坏と考える。器面は緑釉で仕上げられている。

23・24は瓦器碗である。口径13.5cmで、器高は4.5cmである。底部には断面三角形の高台が廻り、見込み部は丸く仕上げている。器面は内外面とも横撫でであるが、一部にヘラ磨きの跡も残されている。24は口径14cmの器高の高い器形である。器面は撫で調整であるが、底部近くの内外面には指圧痕が残る。

25～27は瓦質土器であるが、25・26は同じ器形と考える。口縁部が外反し、胴部には幾条もの沈線が廻り、SK210出土の鉢形の瓦器と同じ器形になる。28としては口縁部と底部近くの同一個体の2点とした挿鉢である。口縁部は内側に折り曲げられて肥厚し、内面には九条の挿り目が底部を中心に放射状に入れられている。

備前焼

第32図1～6は備前焼である。1～3は挿鉢であるが、1・3は口唇部内端部が窪み、挿り目は斜目や交差するが、2は口縁部外面に凹線は無く、内面の挿り目は、底部から放射所に施されている。4～6は口縁部外面が肥厚した大甕である。特に6は大型になり、内面に叩き目、外面には自然釉が付着する。

自然釉

7～9は瓦器である。7は内外面をヘラ磨きした鉢である。8は口縁部が直立する火鉢と考える。口縁端部は肥厚し、外側には断面三角形の小さな突帯が廻り、その間をスタンプ文が施文されている。9は鉢の底部で脚が付く。

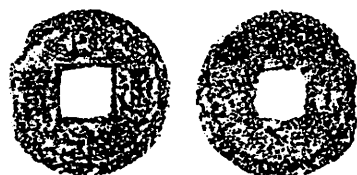
10は長さ5.8cm、重さ24gの土錘である。

軒丸瓦

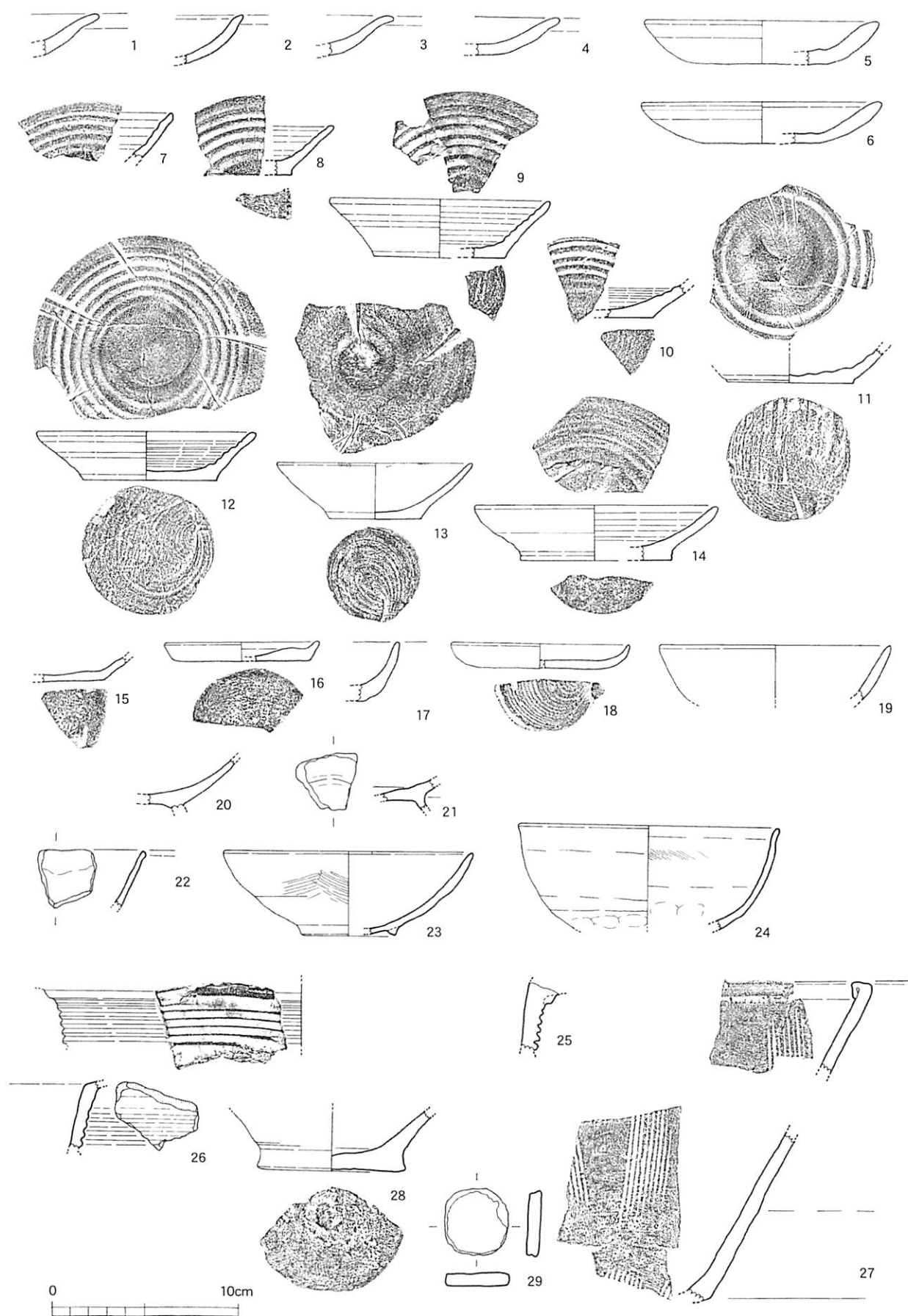
第33図には瓦と土管を図示した。1は珠文と巴文で構成された瓦頭を持つ軒丸瓦で、内外面撫で仕上げである。2～4は唐草文のある軒平瓦である。2は中心飾文である。

軒平瓦

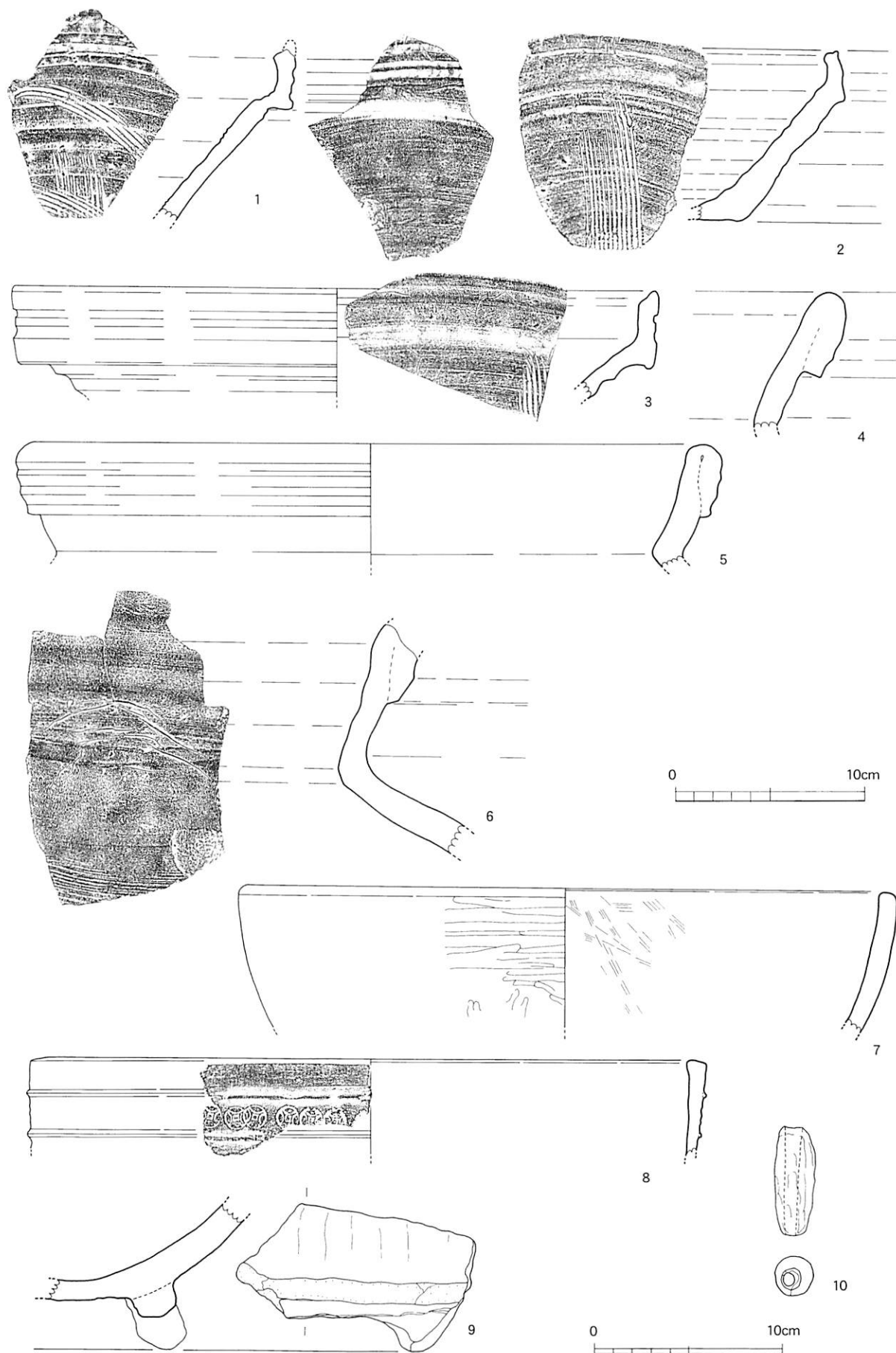
5～7は素焼きの土管である。



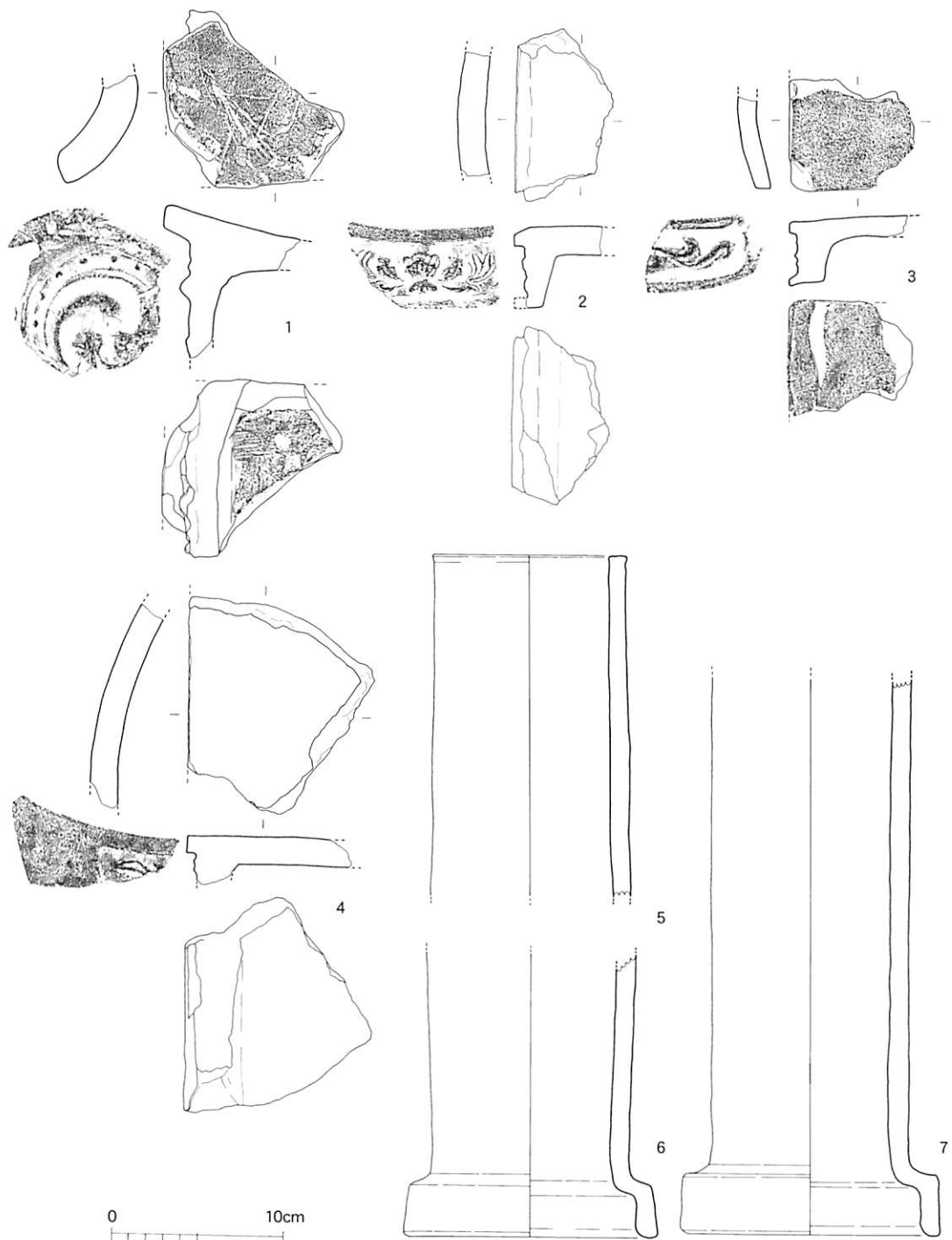
第30図 府内町跡61次調査Ⅱ区出土銅銭実測図



第 31 図 府内町61次調査Ⅱ区包含層出土遺物実測図



第 32 図 府内町跡61次調査Ⅱ区表土・表採遺物実測図 (1)



第33図 府内町跡61次調査Ⅱ区表土・表採遺物実測図(2)

第3章 まとめ

府内町跡61次調査はJR久大線の高架化事業に伴い、現行の軌道敷き沿いの南側を細長く調査した。調査の結果、14世紀から16世紀後半の遺構や遺物が検出されたものの、調査区が狭小なため、この部分だけで遺構の展開を推測するのは困難である。そこで、平成15年に府内町跡31次調査として実施し、すでに報告書が刊行されているJR久大線の北側の調査成果を参照しながら、この調査区の成果を考えてみたい。

瑞光寺

府内町31次調査では、調査区の北側で微高地が確認され、その周辺で区画性の強い溝や、掘立柱建物が検出された。また、瓦も多量に出土していることから、この場所が「府内古図」に描かれる「瑞光寺」にあたる考えた。さらに、明治時代の地籍図や地形から、「瑞光寺」の寺域を東西約100m、南北約50mと想定した。

蔦ヶ池

一方、府内町31次調査区の南側は近世に低湿地を埋め立てられて跡が確認された。このことから現在久大線の線路に沿った市道の北側にわずかに残されている「蔦ヶ池」と呼ばれる低湿地の範囲が広がっていたと推測している。すなわち、中世のこの周辺は、「瑞光寺」がありその南側に池が広がっている景観を想定している。

そこで、府内町跡61次調査で検出された遺構を見ると、I区の北側のほぼ半分の範囲からは、15世紀から16世紀の溝や土坑が検出されており、生活の痕跡が残されている。31次調査で確認した「瑞光寺」が建立されていたと想定される微高地が南側に延びている部分と考えられる。また、61次調査II区でも14世紀から16世紀にかけての土坑が検出されており、この部分は上野丘陵の北側裾と思われる。

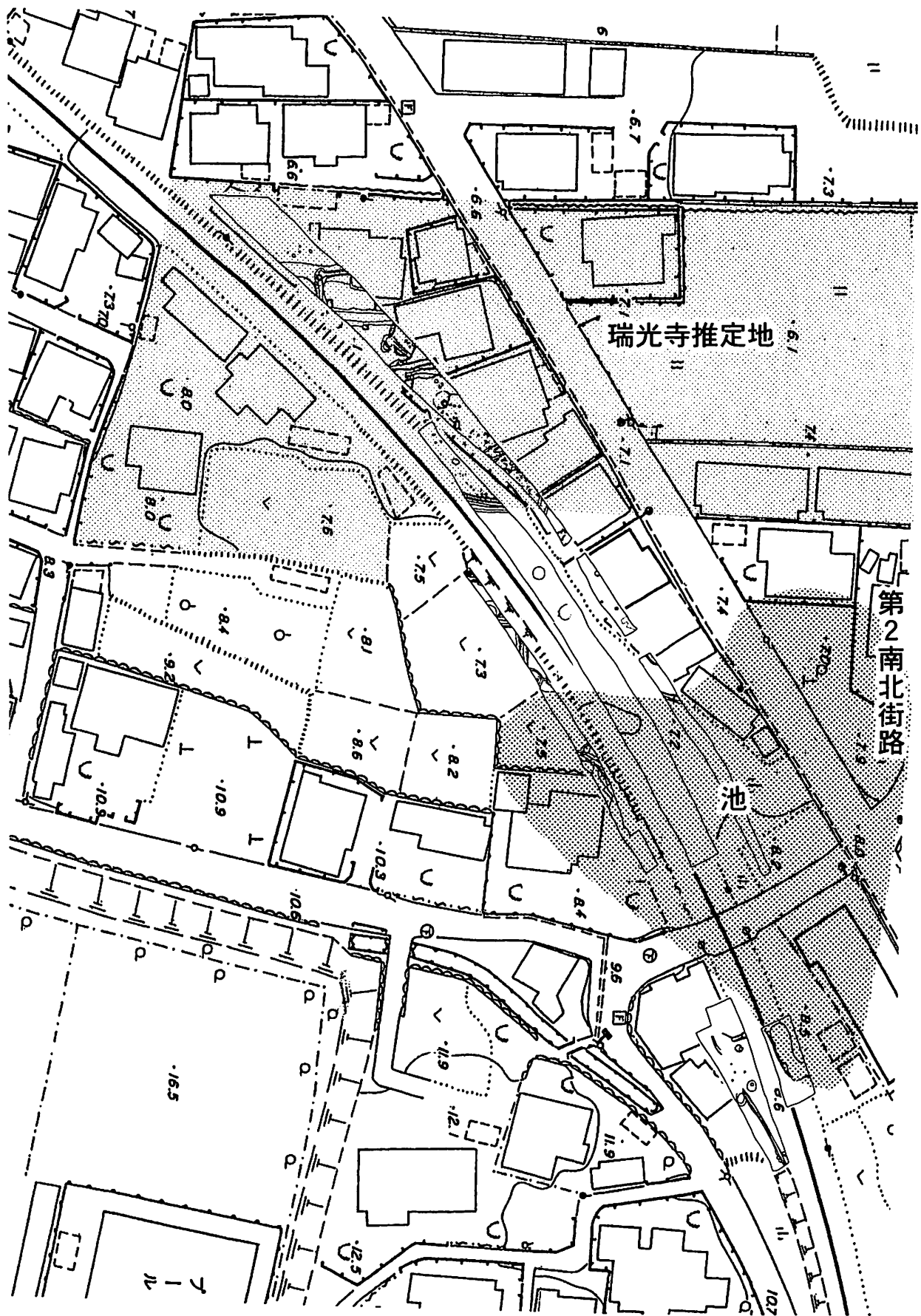
低湿地の範囲

こうした生活の痕跡が残された範囲以外の部分が、61次調査I区の南側になる。この部分で検出された遺構はSK111があり、その南側は攪乱層となっている。SK111は調査の結果、低湿地を埋め立てた跡であることが判明した。最下層から16世紀後葉の京都系土師器が出土していることからその時期から機能していたものと想定される。

この低湿地の範囲を、周辺の調査区である31次調査や平成17年に調査した71次調査を参考に想定すると、西側には上野丘陵の裾を刻み一段低くなった畑地が広がっている。また南側は、61次調査II区の東側に設置した71次調査で、池の護岸と考えられる石列を検出している。北側は31次調査でもその境が確認されており、東側は、現在でも「蔦ヶ池」としてその痕跡を残している部分に続く。さらに東側に第2南北街路が南北に通じており、これが境となったと想定できる。

この池は、SK111の最下層から16世紀後葉の京都系土師器が出土していることから、それ以前には整備されていた可能性が強く、その後、近世にかけて徐々に埋め立てられ、今日に至るものである。

以上のように、府内町跡61次調査の成果は、31次調査で明らかにされた「瑞光寺」と「蔦ヶ池」の存在を、さらに明確化するとともに、「蔦ヶ池」の範囲と形状を想定することができた。この二つの調査区の間を調査した府内町跡71次調査では、「蔦ヶ池」の詳細が確認されており、報告される予定である。



第 34 図 久大線高架化事業に伴う発掘調査で検出された遺構と周辺の地形

第1表遺構一覧表

遺構番号	旧遺構番号		遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	遺物・特記事項
	I区	S-01				
SD-101	I区	S-01	溝		14・15世紀?	浅い溝
SD-102	I区	S-02	溝			浅い溝
SD-103	I区	S-03	溝			浅い溝
SD-104	I区	S-04	溝			浅い溝
SD-105	I区	S-05	溝			浅い溝
SD-106	I区	S-06	溝			浅い溝
SK-107	I区	S-07	土坑			
SK-108	I区	S-08	土坑		15世紀末～16世紀初頭	
SD-109	I区	S-09	溝			石列のある溝
SD-110	I区	S-10	溝		16世紀後葉	浅い溝
SK-111	I区	S-11	土坑			近世に埋め立てられた池跡
SD-112	I区	S-12	溝			
SD-113	I区	S-13	溝		14・15世紀?	
SD-114	I区	S-14	溝			SK-122に切られる
SD-115	I区	S-15	溝		近代	近世の遺物も僅かに含む
SK-201	II区	S-01	土坑		近代	
SK-202	II区	S-02	土坑		近代	SK-201と同じ土坑
SK-203	II区	S-03	土坑		近代	
SK-204	II区	S-04	土坑		近世	
SD-205	II区	S-05	溝		近世	
SK-206	II区	S-06	土坑		近世	
SK-207	II区	S-07	土坑		近世	
SK-208	II区	S-08	土坑		近代	SK-207と同一遺構
SK-209	II区	S-09			近代	攪乱層
SK-210	II区	S-10	土坑		15世紀末～16世紀初頭	
SK-211	II区	S-11	土坑		古代	壺が埋設
SK-212	II区	S-12	土坑		古代	
SP-213	II区	S-13	柱穴			方形で柱痕あり
SP-214	II区	S-14	柱穴			
SK-215	II区	S-15	土坑		16世紀後葉	廃棄土坑
SP-216	II区	S-16	柱穴			
SK-217	II区	S-17	土坑		14世紀代	
SP-218	II区	S-18	柱穴			

第2表遺物観察一覧表(土器・陶磁器)①

押図番号	器種		生産地	法量 (cm)			遺構名	備考
				口径	底径	器高		
10-1	土師器	坏	在地	—	—	—	SD101	
10-2	瓦質土器	蓋	在地	—	—	—	SK108	
10-3	土師器	坏	在地	—	—	—	SK108	
10-4	土師器	坏	在地	—	—	—	SK108	
10-5	土師器	坏	在地	—	—	—	SK108	
10-6	土師器	坏	在地	—	—	—	SK108	
10-7	土師器	坏	在地	—	9.3	—	SK108	
10-9	土師器	甑	在地	—	—	—	SD109	
10-10	土師器	坏	在地	—	6.6	—	SD114	
10-11	土師器	坏	在地	—	6.2	—	SD114	
10-12	須恵質	壺	在地	—	12.0	—	SD115	格子叩き
12-1	白磁	碗	中国	—	—	—	SK111	玉縁
12-2	白磁	碗	中国	—	3.0	—	SK111	
12-3	備前焼	播鉢	国産	—	—	—	SK111	
12-4	備前焼	播鉢	国産	—	—	—	SK111	

第3表遺物観察表（土器・陶磁器）②

挿図番号	器種		生産地	法量（c m）			遺構名	備考
				口径	底径	器高		
12-5	京都系土師器	坏	在地	—	—	—	S K 111	
12-6	京都系土師器	坏	在地	—	—	—	S K 111	
12-7	京都系土師器	坏	在地	8.8	—	2.1	S K 111	
12-8	京都系土師器	坏	在地	8.9	—	2.0	S K 111	
12-9	京都系土師器	坏	在地	10.5	—	2.3	S K 111	
12-10	京都系土師器	坏	在地	12.3	—	2.6	S K 111	
12-11	土師器	坏	在地	8.5	4.5	1.9	S K 111	
12-12	土師器	坏	在地	9.2	5.8	2.3	S K 111	
12-13	土師器	坏	在地	—	—	8.5	S K 111	
12-14	土師器	坏	在地	—	—	—	S K 111	
12-15	土師器	坏	在地	—	—	—	S K 111	
12-16	土師器	鍋	在地	—	—	—	S K 111	
12-17	瓦質土器	鉢	在地	—	—	—	S K 111	
12-18	瓦質土器	鉢	在地	—	—	—	S K 111	スタンプ文
12-19	瓦質土器	鉢	在地	—	—	—	S K 111	スタンプ文
15-1	土師器	坏	在地	7.0	5.0	2.5	包含層	
15-2	土師器	坏	在地	12.2	8.0	4.2	表土	
15-3	土師器	坏	在地	—	—	—	S K 111	
15-4	土師器	坏	在地	10.0	5.4	1.8	包含層	ほぼ完形品
15-5	土師器	坏	在地	—	—	6.2	包含層	
15-6	京都系土師器	坏	在地	—	—	2.3	包含層	
15-7	京都系土師器	坏	在地	—	—	1.8	包含層	
15-8	京都系土師器	坏	在地	10.2	—	1.8	包含層	
15-9	京都系土師器	坏	在地	11.8	—	1.8	包含層	
19-1	京都系土師器	坏	在地	—	—	—	S K 202	
19-2	土師器	坏	在地	—	—	—	S K 204	
19-3	瓦質土器	香炉	在地	12.1	—	—	S K 206	
19-4	瓦質土器	盤	在地	28.2	20.8	2.8	S K 206	
19-5	白磁	壺	国産	3.7	—	—	S K 207	
19-6	瓦質土器	鉢	在地	—	—	—	S K 207	
19-8	備前焼	大甕	国産	—	—	—	S K 207	
19-9	ガラス製	皿	国産	—	—	—	S K 207	
19-11	備前焼	壺	国産	—	—	—	S K 208	
19-13	瓦質土器	鉢	在地	—	—	—	S K 209	
19-14	陶器	船徳利	朝鮮王朝	—	8.2	—	S K 209	
19-15	瓦質土器	鉢	在地	—	16.3	—	S K 209	
22-1	土師器	坏	在地	—	—	—	S K 210	
22-2	土師器	坏	在地	11.9	—	—	S K 210	
22-3	土師器	坏	在地	—	—	—	S K 210	
22-4	土師器	坏	在地	—	—	—	S K 210	
22-5	土師器	坏	在地	7.7	4.4	2.0	S K 210	
22-6	土師器	坏	在地	12.0	6.7	3.1	S K 210	
22-7	土師器	坏	在地	—	—	—	S K 210	
22-8	土師器	坏	在地	—	—	—	S K 210	
22-9	土師器	坏	在地	—	—	—	S K 210	
22-10	土師器	坏	在地	—	—	—	S K 210	
22-11	瓦質土器	鉢	在地	—	—	—	S K 210	スタンプ文
22-12	瓦質土器	鉢	在地	—	—	—	S K 210	
22-13	瓦質土器	鉢	在地	—	—	—	S K 210	脚付き
24-1	須恵質土器	壺	在地	24.8	—	19.6	S K 211	
24-2	土師器	甕	在地	—	—	—	S K 211	製塩土器
24-3	土師器	鉢	在地	—	—	—	S K 211	

第4表遺物觀察表（土器・陶磁器）③

押図番号	器種		生産地	法量 (cm)			遺構名	備考
				口径	底径	器高		
24-4	土師器	壺	在地	14.6	—	—	S K 211	製塩土器
24-5	弥生土器	壺	在地	—	6.8	—	S K 211	
24-6	土師器	盤	在地	16.2	—	—	S K 212	
26-1	京都系土師器	坏	在地	8.2	—	1.9	S K 215	
26-2	京都系土師器	坏	在地	12.1	—	2.4	S K 215	
26-3	備前焼	擂鉢	国産	—	—	—	S K 215	
26-4	備前焼	大甕	国産	—	—	—	S K 215	
26-5	瓦質土器	火鉢	在地	—	—	—	S K 215	
26-6	瓦質土器	火鉢	在地	—	—	—	S K 215	
26-7	瓦質土器	火鉢	在地	—	—	—	S K 215	
26-8	瓦質土器	壺	在地	14.4	—	—	S K 215	
28-1	土師器	坏	在地	8.4	6.1	1.2	S K 217	
28-2	土師器	脚付坏	在地	—	7.1	—	S K 217	
31-1	京都系土師器	坏	在地	—	—	—	包含層	
31-2	京都系土師器	坏	在地	—	—	—	包含層	
31-3	京都系土師器	坏	在地	—	—	—	包含層	
31-4	京都系土師器	坏	在地	—	—	—	包含層	
31-5	京都系土師器	坏	在地	12.6	—	2.3	包含層	
31-6	京都系土師器	坏	在地	12.9	—	2.2	包含層	
31-7	土師器	坏	在地	—	—	—	包含層	
31-8	土師器	坏	在地	—	—	—	包含層	
31-9	土師器	坏	在地	12.1	7.2	3.1	包含層	
31-10	土師器	坏	在地	—	—	—	包含層	
31-11	土師器	坏	在地	—	6.7	—	包含層	
31-12	土師器	坏	在地	11.8	7.2	2.6	包含層	
31-13	土師器	坏	在地	10.6	4.9	2.9	包含層	
31-14	土師器	坏	在地	13.1	8.0	2.9	包含層	
31-15	土師器	坏	在地	—	—	—	包含層	
31-16	土師器	皿	在地	8.3	7.4	1.0	包含層	
31-17	土師器	坏	在地	—	—	—	包含層	
31-18	土師器	坏	在地	9.5	6.7	1.3	包含層	
31-19	土師器	坏	在地	12.4	—	—	包含層	
31-20	土師器	坏	在地	—	—	—	包含層	緑釉
31-21	土師器	坏	在地	—	—	—	包含層	緑釉
31-22	瓦器	碗	在地	—	—	—	包含層	緑釉
31-23	瓦器	碗	在地	13.5	4.5	5.1	包含層	
31-24	瓦器	碗	在地	14.1	—	—	包含層	
31-25	瓦質土器	鉢	在地	—	—	—	包含層	
31-26	瓦質土器	鉢	在地	—	—	—	包含層	
31-27	瓦質土器	擂鉢	在地	—	—	—	包含層	
31-28	土師器	壺	在地	—	8.1	—	包含層	
32-1	備前焼	擂鉢	国産	—	—	—	表土	
32-2	備前焼	擂鉢	国産	—	—	—	攪乱層	
32-3	備前焼	擂鉢	国産	34.1	—	—	表土	
32-4	備前焼	大甕	国産	—	—	—	攪乱層	
32-5	備前焼	大甕	国産	47.4	—	—	表土	
32-6	備前焼	大甕	国産	—	—	—	表土	
32-7	瓦質土器	鉢	在地	35.0	—	—	表土	
32-8	瓦質土器	火鉢	在地	36.1	—	—	攪乱層	
32-9	瓦質土器	火鉢	在地	—	—	—	表土	脚部

第5表遺物観察表（土製品）

挿図番号	名 称	寸法（c m）			遺構名	備 考
		長さ	幅	重量（g）		
12 - 20	土器片加工品	7.2	4.1	72.4	S K 111	瓦質土器利用
18	土管	12.8（口径）	10.5	—	包含層	
31 - 29	土器片加工品	3.6	3.5	13.4	包含層	土師質土器利用
32 - 10	土錘	5.8	2.1	23.9	表土	
33 - 5	土管	12.8（口径）	11.8	—	包含層	
33 - 6	土管	13.9（口径）	12.2	—	包含層	
33 - 7	土管	12.8（口径）	10.1	—	包含層	

第6表遺物観察表（金属製品）

挿図番号	名 称	寸法（c m）			遺構名	備 考
		長さ	幅	重量（g）		
19 - 10	火箸	24.5	0.5	42.0	S K 207	1本分の寸法
21	銅銭	2.5（径）		2.6	S K 210	「正隆元寶」
30	銅銭	2.3（径）		1.7	表土	「寛永通宝」

第7表遺物観察表（瓦）

挿図番号	名 称	寸法（c m）			遺構名	備 考
		長さ	幅	厚さ		
10 - 8	丸瓦	—	—	—	S K 108	コビキ痕
13 - 1	軒丸瓦	—	—	—	S K 111	巴文
13 - 2	軒丸瓦	—	12.8	—	S K 111	巴文
13 - 3	丸瓦	—	—	—	S K 111	縄目叩き
13 - 4	丸瓦	—	—	—	S K 111	縄目叩き
13 - 5	丸瓦	—	—	—	S K 111	コビキ痕
13 - 6	丸瓦	—	—	—	S K 111	
13 - 7	丸瓦	—	—	—	S K 111	コビキ痕
14 - 1	軒平瓦	—	—	—	S K 111	唐草文
14 - 2	平瓦	—	—	—	S K 111	
14 - 3	平瓦	—	—	—	S K 111	
14 - 4	平瓦	—	—	—	S K 111	
14 - 5	平瓦	—	—	—	S K 111	
16 - 1	軒丸瓦	—	11.9	—	包含層	巴文
16 - 2	平瓦	—	—	—	包含層	
16 - 3	平瓦	—	—	—	包含層	
16 - 4	平瓦	—	—	—	包含層	
16 - 5	平瓦	—	—	—	包含層	
16 - 6	平瓦	—	—	—	包含層	
17 - 1	平瓦	—	—	—	包含層	
17 - 2	平瓦	—	—	—	包含層	コビキ痕
19 - 7	平瓦	—	—	—	S K 207	「奇蔵」の文字瓦
19 - 12	軒丸瓦	—	—	—	S K 208	巴文
22 - 14	平瓦	—	—	—	S K 210	古代瓦
27 - 1	丸瓦	—	—	—	S K 215	釘穴 コビキ痕
27 - 2	丸瓦	—	12.1	—	S K 215	釘穴・縄目叩き
27 - 3	丸瓦	—	12.6	—	S K 215	縄目叩き
33 - 1	軒丸瓦	—	—	—	表土	巴文
33 - 2	軒平瓦	—	—	—	攪乱層	中心銚
33 - 3	軒平瓦	—	—	—	表土	唐草文
33 - 4	軒平瓦	—	—	—	攪乱層	唐草文



I区 作業風景



I区 SD109・102・103



I区 SD114完掘状況



I 区 SK108南壁



I 区 SK108・SD104



I 区 SD115土層断面



I区 SD115完掘状況



I区 SK111調査状況



I区 SK111出土漆器



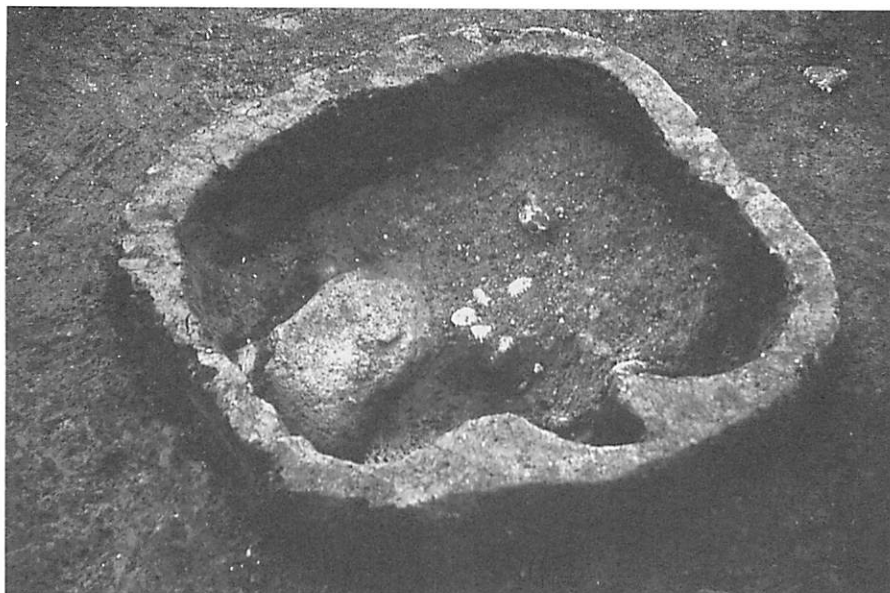
I 区 SK111京都系土師器
出土状況



I 区 SK111軒丸瓦
出土状況



II 区 SK215上面の石組



Ⅱ区 SK211・212



Ⅱ区 SK217



Ⅱ区 地山検出状況

報告書抄録

ふりがな	ぶんごふない ちゅうせいおおともふないまちあとだい61じちょうさ
番名	豊後府内11 中世大友府内町跡第61次調査
副書名	大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	(8)
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第28集
編著者名	坂本嘉弘
編集期間	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田1977
発行年月日	2008年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
ちゅうせいおおとも 中世大友 じょうかまちあと 城下町跡	おおいたし 大分市 ろくぼうみなみまち 六坊南町	44201	51	33° 13′ 20″	131° 37′ 11″	2005年 8月19日 ～ 11月18日	240㎡	大分駅周辺 連続立体 交差事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中世大友府内 町跡第61次調 査区	包蔵地ほか	中世 14世紀～ 16世紀	区画性の強い堀と 溝・土坑・池状遺構	在地系土師質土器、白磁、 京都系土師器、中世瓦、 銅銭	調査区は豊後「府内」の南 部にあたり、瑞光寺推定地 の南側にある蔭ヶ池とそ の周辺の遺構

豊後府内11

中世大友府内町跡第61次調査区

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(8)

大分県教育庁埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第28集

平成20年3月25日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市中判田1977番地
TEL 097-597-5675

印刷 三恵印刷株式会社
〒870-0941
大分市下郡3055-8 (下郡工業団地)
TEL 097-567-1155
